財団法人 日本ハンドボール協会編　平成25年 2月1日発行(毎月1回1日発行) 通巻533号

ハンドボール

特集

第64回全日本総合選手権大会
第14回女子アジア選手権
男子55回・女子48回全日本学生選手権大会

1・2
JAN. FEB. 2013 No.533





［表紙写真：全日本総合・男子優勝の湧永製薬・谷村遼太選手(左)、女子優勝のオムロン・藤井紫緒選手］

財団法人 日本ハンドボール協会
http://www.handball.jp/


molten®
ACENTEC™
Accuracy Enhancing Technology
molten

日本協会創立75周年からのさらなる前進



(財) 日本ハンドボール協会専務理事　川上 憲太

皆様明けましておめでとうございます。この機関誌が皆様のお手元に届く時は、2月2日（土）に行なわれる日本ハンドボール協会設立75周年記念祝賀会の時ではないかと思います。日本ハンドボール協会は第2次世界大戦の影響でやむなく中止となった近代オリンピック東京大会（1936年、東京開催予定）を機に、東京オリンピックで行なわれるはずであったハンドボール競技の日本代表を組織し、メダルを獲得するための強化を開始せんと設立されました。詳しい経緯や足跡は「日本ハンドボール協会75周年記念誌」をお読み頂きたいと思います。ここに掲載されている記事を読み返す時、日本のハンドボール界の諸先輩そして皆様方のご苦労ご努力ご尽力に触れ、改めて心の底から熱いものがこみ上げてまいりました。また、ここから80周年、100周年に向けての責任を思う時、身が引き締まる思いであります。たくさんの世界に羽ばたく強くて逞しい選手を育てあげることに、皆様と共に一歩一歩前進してまいりたいと存じますので、より一層のご理解、ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

ハンドボールは今や世界180か国で展開されるビッグスポーツの一つであります。たくさんの国がオリンピックに向けて、世界選手権に向けて日々努力し、技術を磨き、体力を鍛え、知識・分析を積み重ねてしのぎを削っております。いまやヨーロッパ勢のお家芸ではなく中東勢、南米、アフリカ勢にもその勢いは広がっています。直近の世界選手権では女子は14位でした。男子は前回のスウェーデンでの世界選手権では16位でした。オリンピック出場は北京・ロンドン大会とも男女共に世界最終予選で涙を飲んでいます。あともう少しです。しかし、この、もう少しが非常に厳しく高い壁であります。この壁をぶち破るには並大抵な努力、尋常な考え方では突破できません。津川新強化本部長の強化方針の基、強化スタッフのパワーを期待するところであります。それには現在のNTS、ジュニアアカデミーの充実の中から素晴らしい素質の優秀選手を日本代表に送りこまなければなりません。昨年、女子ユース日本代表は世界選手権に出場し、初めてベスト8に入りました。次いで男子ユース日本代表は、アジア選手権でカタールに次ぐ2位となり、初めて世界選手権の切符を取り、成果が出始めました。日本代表も少数精鋭で行ない、第二日本代表軍団でしっかり鍛えた、上を狙うギラギラした選手との常時入れ替え、サバイバルを徹底して世界にアジアに挑む体制を取ってまいります。

昨年12月には、女子日本代表が栗山新監督のもとアジア選手権（世界選手権予選）に挑み、3位で世界選手権の切符を獲りました。しかしまだまだ課題は続きます。

男子日本代表は、全日本総合選手権大会終了と同時に強化合宿に入り、年末年始無しに1日4部練習に取り組み、正月2日にスペインカップに出場するべく日本を発ちました。スペインでは世界選手権直前のスペイン代表・ブラジル代表らと戦って、課題の抽出を行いました。男子日本代表のこれからの強化合宿における選手の入替、絞り込みをすると共に、新しい日本代表選手の台頭に期待したいと思います。皆様どうぞご注目、ご声援よろしくお願いします。

日本協会は平成25年度より公益財団法人となります。これに伴い新しく選任される評議員そして評議員会の権限と責任が従来とは違い、非常に重要な役割となり、理事及び理事会は業務執行機関として評議員会の審査を受ける形になります。今後、益々日本協会のガバナンスとコンプライアンスの徹底が必要とされ、責任体制の明確化、執行活動の的確さが求められることになります。日本協会の事業活動にご理解ご協力よろしくお願いします。

今年の9月7日開催のIOC総会で2020年のオリンピック開催都市が決定します。東京に招致すべく東京都を始め、日本オリンピック委員会はもちろん日本政府も動き始め、いよいよ首相自らの活動も計画されているようです。まさに国を挙げての戦いです。スポーツが 国、国民にもたらす数知れない力は誰しもが認めるところです。そしてハンドボールにとっても計り知れないチャンスが到来します。ハンドボール界全体で東京オリンピックが来るよう招致活動に全力で協力しましょう。

平成24年度

第64回 全日本総合ハンドボール選手権大会

湧永製薬、8年振り14回目の優勝　オムロン、2年連続15回目の優勝

[最終順位]
【男子】優勝：湧永製薬　2位：トヨタ車体　3位：大同特殊鋼・大崎電気
【女子】優勝：オムロン　2位：北國銀行　3位：広島メイプルレッズ・ソニーセミコンダクタ

【男子】最優秀選手賞　谷村　遼太（湧永製薬 No.2）　最優秀監督賞　玉村　健次（湧永製薬）
【女子】最優秀選手賞　藤井　紫緒（オムロン No.7）　最優秀監督賞　黄　慶泳（オムロン）

第64回全日本総合ハンドボール選手権大会を終えて

大阪ハンドボール協会理事長　**中村 博幸**

まずは、男子：湧永製薬、女子：オムロンの皆様優勝おめでとうございます。

連日熱戦の好ゲームが続きましたが、日本リーグ勢の活躍はもちろんのこと、男女とも大学勢の健闘がこの大会を盛り上げてくれた一因ともなっているのではないでしょうか。

さて8年ぶりの大阪での全日本総合ハンドボール選手権大会ということで、大阪ハンドボール協会では、まず観客動員を第一課題として取り組みました。残念ながら昨年のロンドンオリンピックには日本のハンドボールチームが男女とも出場できませんでした。モチベーションの下がっているハンドボール競技を盛り上げるためにはいかにすべきかは難問中の難問でした。日本のトップレベルの素晴らしいプレーで観客を引き寄せるのは当然ですが、大阪ではハンドボール競技者への動員にまず力を入れました。中学生、高校生を中心にある程度の前売りの人員は確保しましたが、目標の2,000人には足りない予測がたちました。従来のやり方ではハンドボール関係者以外の入場者確保は困難であるので、子どもを対象に付き添いの保護者も取り組んでは…という方向性が出てきました。そこで、今までにない新しい取り組みの発想として、ハーフタイムや試合の合間にイベントをはさんで、入場者を確保しようと、大阪では特に人気のある「吉本芸人」の出演が決まりました。

来ていただいた子ども達に、ハンドボールの醍醐味と楽しさを味わっていただくとともに、ご来場者全員に大阪協会オリジナルの小冊子をお配りし、その中でキッズチームの紹介をして受け皿があることを掲載し、ハンドボール層の拡大をねらいとしました。

Q. こどもの運動能力をあげたい。どうしたらいいですか？

A. 本気であげたいなら、ハンドボールを始めることです。

ハンドボールは、早いゲーム展開の中で「走る」「跳ぶ」「投げる」を繰り返すスポーツです。相手との激しいコンタクトもあり。カラダの強さ、柔軟性。相手を押し出すパワー、フェイントでかわす俊敏性が求められます。また。一試合（60分）を走り続ける持久力も必要です

皆さんが学校で行ったスポーツテストを思い出してみて下さい。そのすべての項目において、ハンドボールの要素が含まれています。それが。運動能力をあげる答えです。

是非。その目で確認してみて下さい　ハンドボールの魅力の高さを　きっとハンドボールのイメージが変わるはずです。

（オリジナルの小冊子から抜粋）

12月22日（土）の準決勝には試合のハーフタイムに吉本興業の若手漫才師〔女と男〕〔銀しゃり〕〔藤崎マーケット〕〔スマイル〕に出演していただき、熱戦続きの息抜きに笑いを提供してもらいました。今大会からハーフタイム15分間と、一般観客側からはちょっと長く感じる時間でしたが、笑いのひとときは観客から大好評でした。

12月23日（日）には女子決勝と男子決勝の試合の間に、今小学生を中心に大ブレイク中の「嘉門達夫」さんがライブを行い、子どもだけでなく、幅広い年齢層の皆さんに楽しんでいただきました。また女子決勝のハーフタイムには〔モンスターエンジン〕が駆けつけてくれて、会場を盛り上げてくれました。

お陰様で12月22日(土)の準決勝の観客数は約2,600人、12月23日（日）の決勝は約2,300人の観客を動員することができました。しかし、この時期の大会運営は役員の確保が第二の課題として困難性を感じます。協会役員の多数が中・高の教員であるため、学期末の校務で職場を離れられず、土・日を除いて平日は少人数で運営しなければならず、今後の大会開催への課題となるはずです。今回は補助役員に関西学連の大学生が応援に来てくれたので、運営に支障をきたすことなく進み、大変感謝しています。

日本協会では2年後に「日本選手権大会」を計画されていますが、開催地は大変な負担を強いられることが必至なので、地域開催（一例として東京・神奈川・千葉で2日間ずつ）等を考えて、検討されては如何でしょうか。

ひとまず成功裡に終えることができ、今は胸をなで下ろしております。

最後になりましたが、大会を開催するにあたり、後援をいただきました関係団体、広告協賛の各社、テレビ中継をしてくださったNHK、そして特別協賛の読売新聞社や連日報道をしていただきました報道関係各社に対し、この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。



男子優勝　湧永製薬

湧永製薬ハンドボール部監督　玉村 健次

はじめに、東日本大震災復興支援第64回全日本総合ハンドボール選手権大会を開催するにあたり、ご尽力いただいた大阪ハンドボール協会をはじめ日本ハンドボール協会、ならびに関係各位の皆様に心より厚く御礼申し上げます。この度、湧永製薬は第64回全日本総合ハンドボール選手権大会において8年ぶり14回目の優勝を果すことが出来ました。この優勝は、日頃から湧永製薬ハンドボール部を支えてくださっている湧永オーナーをはじめ社員の皆様、日本専門薬局同志会の先生方、そして全国の湧永ファンの方々の応援があってこその結果と思っています。

昨年の大会は、準々決勝敗退という湧永の歴史を汚す結果でしたが、名誉挽回を果すためにはこの大会で優勝するしかないと、大会前にはミニキャンプを張り、対戦相手を徹底的に分析し大会に挑みました。また、日本リーグ期間中の11月には主力の負傷欠場があり、チーム力が減少し、不安を抱えていましたが、全日本総合までの約1ヶ月の期間が幸いし、負傷者がチームに戻り、万全な状態で大会に入れたことも勝因といえます。

準々決勝からの登場となった対トヨタ紡織戦は、両チームが点の取り合いとなり、前半からのリードを守り、辛うじて勝利する事ができました。

準決勝の対大同特殊鋼戦は、主力の樋口選手がアキレス腱を断裂するというアクシデントがあったものの、攻撃ではベテランの古家がコントロールし、ゴールキーパーを含めた堅守で凌ぎ、決勝に駒を進めることが出来ました。

決勝の相手は、準決勝で4大タイトルの内、すでに2つタイトルを取っている好調の大崎電気を破った大会2連覇を狙うトヨタ車体との対戦でした。立ち上がりに2連取され嫌なムードが漂う中、準決勝から好調の谷村が中央からステップシュートを決め、反撃の狼煙をあげました。アグレッシブなディフェンスが機能し、相手に簡単に得点を許さず、中盤は4点リードする場面もあり、主導権を握りました。しかし、タイムアウト請求後に自分たちの攻撃のミスから連続速攻で得点され、結局、同点で前半を終了しました。今シーズンのトヨタ車体との試合内容は、前半でリードされ後半に追い上げるパターンが多かったので、前半をリードされず同点で折り返せた事は、チームにとって後半に勝負が賭けられるという意識が芽生えた点では幸運でした。そして、後半は先に1点でもリードしていけば有利に試合を運べると思い、開始早々のオフェンスの重要性と前半に成功したアグレッシブなディフェンスを継続して行う事を指示しました。後半が始まり、この大会絶好調の中浦がミドルシュートを決め、チームに勢いをつけました。守ってもベテランゴールキーパーの松村がディフェンスとの連携でトヨタ車体のシュートを弾き返し、簡単に得点を許さず、有利に試合を運ぶ事が出来ました。また中盤に退場者を出しても攻撃では慌てずに得点を狙い、守りでも簡単に得点されない粘りのディフェンスが機能した "湧永らしい" 内容でトヨタ車体の猛攻を凌いだことが優勝という結果に繋がったと思います。

この大会を振り返ると、準決勝、決勝の相手を25点以下で抑えることができたディフェンス力が勝因といえます。このディフェンス力をさらに強化し、"湧永山脈" の復活を目指して残りのタイトル奪取を目指していきたいと思います。

最後になりますが、日頃からご支援、ご協力いただいた広島県体育協会、広島県ハンドボール協会、湧永製薬の社員の皆様、日本専門薬局同志会の先生方、会場に足を運んで応援してくださったファンの皆様、支えてくださったすべての方々に心より御礼を申し上げます。そして共に戦った素晴らしい選手とスタッフにも心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

湧永製薬ハンドボール部　谷村 遼太

湧永レオリックとして8年ぶり14度目の全日本総合優勝、自分個人としては新潟国体以来3年ぶりとなるタイトルを勝ち得た今大会、チーム状態が万全とは言えない中で勝ち続けることができ本当に嬉しく思います。また、これまで長い



男子決勝戦［湧永製薬×トヨタ車体］より

間勝ちきれなかった自分たちを見放すことなく応援し続けてくださった会社の方々や家族、ファンの皆さんに厚くお礼を申し上げます。ようやく皆様方に朗報をお伝えすることができました。さらに今回は個人タイトルまで授与していただき、今まで自分のハンドボールを指導してくださった恩師の方々に一つ恩を返せたとほっとしています。

今年の湧永レオリックは決して栄えのあるチームではありません。今回4強に上がったほかのチームに比べ日本代表選手も少なく、スタープレーヤーもいません。派手なプレーで得点を取るわけでもなく、トリッキーなディフェンスで相手を翻弄するのでもない、堅実に泥臭く、全員で1点を守り全員で1点を取りに行くのがスタイルです。ともすれば古臭く見られてしまうチームカラーですが、そんなチームが優勝できたということにチームスポーツの面白さ、醍醐味が表れているように思います。個人個人が自分の能力を100%発揮し、与えられた責任を全うすることで、チームとして一つの目標を達成する。それを体現できたことが非常に嬉しく、またそのチームの一員であることに誇りを感じます。会場に来られた、もしくはTVで観戦していた観客の方、特にハンドボールをしている中高生がチームの纏まりの強さを感じとってくれていたら幸いです。

まだまだシーズンは続きます。今回の優勝をたまたまと言われないよう、あの頃の湧永は手におえない強さだったと言っていただけるよう、まずは総合以上に長く遠ざかっているプレーオフの優勝を目指します。湧永レオリックの伝統である『堅守』に磨きをかけ、観客の皆様に楽しんでいただける試合をしていきますので、ぜひ会場まで足を運んでいただき今まで以上の声援を送ってください。

この度は多くのご声援と祝福の言葉を頂きまして本当に有難うございました。

女子優勝　オムロン

オムロンハンドボール部ヘッドコーチ　黄　慶泳

先ずは第64回全日本総合選手権大会において2年連続優勝できたことを素直に心から喜んでおります。

優勝の原動力となったのは選手の頑張りは勿論ですが、何より会社の応援団を含めて会場まで足を運んで熱い応援をして頂いた皆様のお陰だと強く感じております。

また開催地を含めて色々とお世話になった方々に改めまして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

大会を準備するまでに、日本代表チームが強化合宿とアジア選手権参加のために、長期間チームを離れていて大会直前現地合流したこと、ゲーム司令塔である石立選手の怪我による大会不参加は非常に大きな不安材料でありました。しかし、選手たちは呼吸を合わせる時間がない状況をよく理解し、危機感とより結束力を高めたチームワークで最後まで諦めない戦いをしてくれたと思います。

試合内容に関しては、初戦から選手の体が重くて思うような展開ができなかったこともあり、準決勝は延長戦末の勝利、決勝も一点差勝負に縺れる厳しい試合内容でした。

様々な状況に応じるチーム戦術の準備が徹底できなかったことは勿論、他チームの力が著しく伸びてきたことも接戦の原因であったと認識しております。これからは一度ブレイクしていた日本リーグの残り後半戦が再開します。

他チームと力の差がなく厳しい戦いが続く中で、チームの総合力と危機管理力が長丁場を乗り越える鍵になると思っております。今回の優勝に満足することなく更なる成長を求め、シーズン最大のタイトルである日本リーグのプレーオフ優勝に繋げて行きたいと考えます。

最後になりますが、引き続き皆様方のご支援、ご声援頂きます様お願い申し上げましてご報告といたします。

ありがとうございました。



オムロンハンドボール部キャプテン　藤井 紫緒

第64回全日本総合選手権大会が12月19日～23日まで大阪市中央体育館で行われました。

大会直前の12月18日まで、日本代表8名がアジア選手権のため約一ヶ月間チームを離れていたこともあり、チームとして不安を抱えた状態で今大会を迎えました。

初戦の東海大学戦では硬さがあり、ぎこちないゲーム展開となりましたが、チーム練習が出来ていなかったコンビネーションのズレやミスなどはゲームの中で修正し、オムロンの持ち味である守りから速攻に重点をおいて戦い、初戦を勝つことが出来ました。東海大学のスピーディーで細かいハンドボールに苦戦しましたが、実業団としての維持とプライドが問われる試合であったと思います。

準決勝は、社会人大会の決勝戦で延長の末苦い経験した広島メイプルレッズとの対戦。試合序盤から、相手の勢いを止めることが一番の戦い方と分かっていながらも、最後まで相手の勢いを止める事が出来ず、お互いに点の取り合う内容でDFに課題が多く残った展開でしたが、後半残り数秒で追いつき延長戦に。延長戦では一進一退の攻防を制し決勝戦へ駒を進めました。

決勝戦の相手は北國銀行との対戦で、準決勝での反省課題の下で粘り強くディフェンスすることによりオムロンのペースで試合を運びました。後半点差を広げ4点差をつけるも自分たちのミスで残り30秒で一点差まで追い上げられましたが、20対19で2年連続15回目の優勝をすることができました。

約1ヶ月間、母体と全日本組が離れての強化となりましたが、今まで積み重ねてきたチームワークが勝利に繋がったと思います。課題も多々あった大会ではありましたが、1点差で勝ち切ったことは、私たちにとって価値ある優勝になったと実感しております。

今大会開催にあたりご尽力頂きました大会関係者の皆様、会場で応援してくださった皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

女子決勝戦［オムロン×北國銀行］より



戦　評

男　子

▼1回戦

大阪体育大学　36（16-10、20-15）25　トヨタ自動車東日本

早稲田大学　21（10-8、11-9）17　Honda

日本体育大学　38（20-13、18-14）27　長崎社中

中京大学　25（7-12、18-12）24　ＨＣ岐阜

▼2回戦

大阪体育大学　35（21-10、14-19）29　北陸電力

トヨタ紡織九州レッドトルネード　35（18-14、17-19）33　早稲田大学

琉球コラソン　31（17-15、14-11）26　日本体育大学

豊田合成　33（14-12、19-16）28　中京大学

▼準々決勝

大同特殊鋼　31（15-14、16-12）26　大阪体育大学

湧永製薬　32（18-15、14-15）30　トヨタ紡織九州レッドトルネード

トヨタ車体　33（10-12、13-11）31　琉球コラソン
延一（3-1、1-3）延二（3-2、3-2）

大崎電気　35（20-11、15-20）31　豊田合成

▼準決勝

湧永製薬　23（13-12、10-8）20　大同特殊鋼

大同・野村の連続ミドルシュートで試合が始まる。湧永も新のサイドシュートで得点。大同の高いディフェンスに湧永が攻めきれず、大同のリードで試合が進んだ。湧永も好ディフェンスから速攻が決まり同点に追いつき、カットインシュートも決まり3点リードする。大同も大城のサイドシュートや下村の速攻で点を重ね、GK久保のファインセーブもあり同点に追いついたが、湧永の新のカットインシュート、谷村のロングシュートが決まる。最後に大同も速攻が決まるが、湧永の1点リードで前半終了。後半早々湧永の連続得点で2点リード。その後両チーム点を重ねる。湧永のすばらしいディフェンスから新の速攻が決まり4点リードとなる。大同GK久保のファインセーブから速攻で点を取り、後半15分湧永の退場で数的優位になり、2点差に詰める。後半23分湧永・古家のミドルシュートで3点差に拡げる。湧永の退場で大同は優位になるが得点できず、3点差で湧永の勝利。

トヨタ車体　28（13-10、15-16）26　大崎電気

昨日第二延長まで闘ったトヨタ車体は、その疲れも見せず、木切倉の功打や鶴谷の速攻などで順調に加点し、10分過ぎまでに6対1と5点差のリードを奪った。17分過ぎにトヨタ車体に退場者が出ると、大崎電気は積極的なDFからボールカットを狙い、たちまち2点差とした。しかし、退場者が戻るとトヨタ車体も落ち着きを取り戻し、逆に大崎電気に退場者が出て、結局3点差でトヨタ車体リードのまま前半を終えた。後半、大崎電気は宮崎から永島へのポストパスが良く決まり、またトヨタ車体も右サイドから鶴谷が連取するなど、1点を争う好ゲームとなった。速いパスワークから両サイドを広く使うトヨタ車体に対して、中央3人に攻撃が集中する大崎電気はトヨタ車体DFの術中にはまった。トヨタ車体GK木下の好セーブも光り、28対26で勝利した。

▼決勝

湧永製薬　28（14-14、14-9）23　トヨタ車体

決勝戦は開始1分トヨタ車体・木切倉がステップシュートで先制。続けて横地のロングシュートが決まるが、次第に湧永製薬のディフェンスが機能し始める。トヨタ車体はGK木下の好セーブを得点に繋げられず、逆にポストを使われて前半20分には湧永が4点のリードをつける。シュートミスが続いた湧永製薬のタイムアウト後、トヨタ車体・木下が好セーブを連発し、石戸の3連続得点などで一気に5点を奪い逆転に成功。湧永製薬もすぐにスカイプレーを志水が止め、14対14で折り返した。後半は湧永製薬が中浦の連取で2点リードするが、トヨタ車体もすぐに追いつく。その後、トヨタ車体はなかなかチャンスを作れず、シュートも後半から出場したGK松村にはじき出されてしまう。タイムアウト後、落ち着きを取り戻したトヨタ車体は光増のステップシュートなどで追い上げ1点差とするが、湧永製薬は松村の好セーブ、谷村のロングシュートなどで23分またもや4点のリードとする。最後のタイムアウト後、トヨタ車体はディフェンスシステムを変更するが、谷村のロングシュートを止められず、28対23で湧永製薬が8年振り14回目の優勝を手にした。

女　子

▼1回戦

東海大学　25（15-13、10-10）23　HC高山

大阪教育大学　30（11-13、19-15）28　三重バイオレットアイリス

大阪体育大学　29（12-12、17-8）20　HC名古屋

香川銀行T・H　23（12-10、11-12）22　東京女子体育大学

▼準々決勝

オムロン　26（15-3、11-9）12　東海大学

広島メイプルレッズ　39（19-14、20-14）28　大阪教育大学

ソニーセミコンダクタ　22（11-8、11-9）17　大阪体育大学

北國銀行　23（10-5、13-7）12　香川銀行T・H

▼準決勝

オムロン　30（14-12、12-14）29　広島メイプルレッズ
延（2-1、2-2）

立ち上がり両チーム硬さからか膠着状態であったが、10

分にメイプルが 5 対 2 とした。メイプルは 15 番高山のポスト、オムロンは 5 番巻が得点を決め、一進一退の展開であったが、オムロンは 19 分に 3 連続得点で 8 対 8 の同点とした。その後、メイプルは 7 番宋、オムロンは 7 番藤井、17 番東濱が得点を重ね、14 対 12 とオムロンがリードで前半を終えた。後半、メイプルは 7 番宋のステップシュートなどで得点し、6 分過ぎに 16 対 16 対の同点とした。オムロンは、メイプル 7 番宋にマンツーマン DF で対応し、22 番金のポストシュートなどで 4 連続得点し 23 対 21 と逆転した。しかし、メイプルは 5 番大前、15 番高山が得点し 28 分に 25 対 25 対と再び追いつき、結局 26 対 26 で延長戦に突入した。延長戦は、オムロン 7 番藤井、17 番東濱、メイプル 7 番宋が得点し、一進一退の攻防を繰り広げ、最終的に 30 対 29 でオムロンが勝利した。

北國銀行　23（10-6、13-11）17　ソニーセミコンダクタ

延長までもつれた第 1 試合の熱気の余韻の中、ソニーのスローオフで前半スタート。両チームとも実力ある GK を中心にしっかりと守り、速攻に転ずる展開となった。立ち上がりソニーは速攻で内富が決めれば、北國・若松が決め返す。セットの攻撃では、ソニー・石井がループでサイドシュートを決めれば、北國・横嶋もサイドシュートを決める。前半11 分頃から、北國のセットプレーが決まり出し、リードを拡げて 10 対 6 とした。後半、反撃に転じたいソニーだったが、逆に北國に走られて更にリードを拡げられた。後半 19 分過ぎに北國が二人退場してから、ソニーは高橋のカットインシュート、黒木の速攻で反撃するが、差は縮まらず北國銀行が決勝にコマを進めた。

▼決勝

オムロン　20（9-9、11-10）19　北國銀行

前半開始早々、オムロンは勝連のサイドシュートで得点すると、北國銀行も直後に上町がミドルシュートを突き刺し、激しい点の取り合いになるかと思われた。しかし、その後両チーム GK のファインセーブもあり、一転ロースコアのゲーム展開となって、前半は 9 対 9 で終えた。後半も 15 分過ぎまで 1 点を争う一進一退の展開が続いたが、オムロンは稲葉の好配球から藤井、東濱が加点し、守っては金を中心とした堅いディフェンスで徐々に点差を広げた。北國銀行も 25 分過ぎから速攻で 3 点連取し 1 点差に追い上げ、残り 30 秒でチームタイムアウトを取り、最後の攻撃に望みを掛けた。しかし、気迫のこもったオムロンディフェンスの前にシュートが打てず、タイムアップを迎えた。20 対 19 の 1 点差でオムロンが 2 連覇を飾った。

PHOTO SNAP　PHOTO SNAP　PHOTO SNAP　PHOTO SNAP

会場となった「大阪市中央体育館」

今回で数えること、第 64 回目の全日本総合選手権

大阪から多くの選手を輩出していることが窺える

2013 年 9 月 7 日の IOC 総会にて開催地が決定する。日本全体で誘致気運を盛り上げ、是非とも「東京」開催を実現しよう

準々決勝までは 2 面を使っての試合

アジア選手権で見事、世界選手権の出場権を獲得した全日本栗山監督は、早速、自らのチームで陣頭指揮

「未来の子どもを育てるハンドボール」大阪ハンドボール協会のメッセージ

以下は、今大会活躍の大学チームの応援旗、部旗から…

第14回 女子アジア選手権 2013年 世界選手権予選

最終順位			
優勝：韓国	2位：中国	**3位：日本**	4位：カザフスタン
5位：北朝鮮	6位：ウズベキスタン	7位：チャイニーズタイペイ	8位：インド
9位：イラン	10位：トルクメニスタン	11位：インドネシア	12位：クウェート

――2013年世界選手権の出場権を獲得――

女子アジア選手権報告

日本代表女子チーム団長　津川　昭

2012年12月7日～12月16日まで、女子アジア選手権としては最大の12ケ国、そしてハンドボール界としては、今まで国際舞台にたったことのないインドネシアで開催されるなど大変興味深い大会であった。

開催地であるジョグジャカルタは首都ジャカルタから、1時間ほどのフライトで大変歴史のある都市、近郊には二ヵ所の世界遺産がある。インドネシアの国土は日本の約5倍、人口は世界4位の2億3000万人とのこと、まだまだ発展途上の国で町にはオートバイがあふれている。特にジョグジャカルタ地方には親日家が多いとのことだが、温厚でやさしい人柄の人が多いと感じた。今はちょうど雨の多い時期で、朝は晴天であっても夕刻からシャワーのような激しい雨が多く、気温は30度そこそこであったが湿度が多く蒸し暑い。

試合会場は国立大学のホールであるが、体育学部があるせいか3000人以上収容できる立派な建物だった。ただ、にわか造りのコートでタラフレックスは敷いてあるものの、その下に凹凸があったり、照度不足や臨時に設置されたエアコンだけで、ベストとは言えないものの覚悟していたよりはましという状態であった。後にも先にもハンドボールコートは本会場だけのため、練習会場は市内の簡易な建物の有料フットサル場であった。試合の運営も不慣れからか変更が多く、明日のスケジュールは何とか組めても、二日後は組めない状況であった。ただ、インドネシア協会の精一杯さは伝わり、「慣れてないのだし仕方ないか」程度の事が多かった。

大会全体としては、AHF関係者にも連絡が無いということで欠場と思われていたウズベキスタンが、試合当日（テクニカルミーティングも欠席）に到着、試合時間が過ぎていたために、一旦は没収試合となっていたのが、急遽、休息日に繰り入れられるなど波乱含みであったが、結局は参加予定の12ケ国が全部揃うこととなった。ただしレベル差は著しく、初参加のクウェート、インドネシアは日本の中学生レベルであった。大会としてはどうかと思うが、各国が普及・発展していくためには致し方ない。一方、イランはセルビアから女性指導者を招聘するなどし、着実に実力を向上させている。北朝鮮も侮れない実力を付けており体格的には韓国以上、身長も全体的に高く、平均的には中国、カザフスタンに次ぐと思われる。またウズベキスタンも将来的には侮れない存在となることが予想できる。中国はこの大会に備え約1年前から準備してきたとのことであったが、ロンドン予選時に比べ、コンビネーションが多彩になっている。また左利きで190cm近い長身選手No.3 MEIZU.Yanのフリースローは破壊力があり、日本だけでなく韓国も手を焼いた。韓国は監督も交代し、ロンドン組は3名残っている。中でもNo.19 RYU. Eunhee（左利き180cm程度）は大きな得点源として大車輪の活躍をみせている。

さて肝心の日本チームだが、栗山新体制となり選考合宿、そしてリーグ・インカレの合間を縫っての強化合宿等、時間的余裕の無い厳しい状況であったが、高橋キャプテン中心に良くまとまり、特にベテランプレーヤーが気を抜くこと無く、むしろ積極的にチームの結束力を高めるのに貢献してく



表彰式を終えて記念写真


誕生日にプールサイドでディフェンス練習と騙され、突き落とされた横嶋選手

れたことは大変大きく感じた。また、出発直前にセンターの要である石立選手が左中指骨骨折というアクシデントに見まわれたが、石野、後藤、稲葉選手らが良く穴を埋めてくれた。残念ながらセミファイナルで中国に敗れ、三位という結果で終わったが、とりあえず世界選手権の出場権を得、リオに向けての最初の試練を乗り越える事ができたと考えている。新チームとしての課題、個々の選手の課題も鮮明になり、これからが本格的スタートとなる。

スタッフ・選手たちは帰国後そのまま大阪へ向かい全日本総合選手権に出場する。各所属チームには大変な負担をお掛けするにもかかわらず、全面的にご協力頂き感謝の念に耐えません。本当にありがとうございました。


初参加のクウェート戦

アジア選手権大会報告

日本代表女子チーム監督　**栗山 雅倫**

平素より、日本代表チームの活動に対し、沢山のご声援を賜り、心より御礼申し上げます。

さて、12月7日から12月16日にかけて、インドネシア・ジョグジャカルタにて開催されました、第14回女子アジアハンドボール選手権大会のご報告をさせて頂きます。

アジア選手権大会は、世界選手権の出場権をかけた大会であり、各チームの力の入れようは、相当なものであります。今回は、女子のアジア選手権大会では、史上最大規模となる12カ国の参加を得て、大変活気溢れるものとなりました。インドネシアにおけるこのような規模のハンドボール大会を開催するのは、初めての機会であったということで、大会運営には何かと課題を抱えておりましたが、現地の方々の心温まるホスピタリティで、結果的には深く思い出に残る大会となりました。日本から応援頂いた皆様には、大会の様子がネットを通してでもなかなか伝わりづらかった点も多かったようですが、是非雰囲気を味わって頂きたいと思える様な大会であったように感じております。

さて、今回の結果は、韓国、中国に次ぐ第3位となりました。アジアナンバーワンをとり、リオオリンピックの出場を目標とするチームにとっては、これからの努力をしかと受け止める覚悟を決めるべき結果を頂いたと感じております。しかしながら一方で、2週間の準備期間で乗り込んだ大会ながら、選手たちは、大会を通した成長を、しっかり示してくれた機会であったとも捉えております。アジアの世界選手権出場枠は、3チームでありますが、これまでは韓国が世界選手権上位に入っていたこともあり、アジア4位で出場機会を得られた大会もありましたが、今回は韓国を含めて3チームしか出場権を得られない状況で、大変厳しい船出となりました。さらには大会直前の主力選手の怪我による戦線離脱等もあり、チームや選手にかかるプレッシャーも小さくありませんでした。各国の勢力図は、オリンピック4位の韓国の実力はもちろんのこと、ライバル一角である中国、カザフスタンは、昨年のオリンピック予選終了後から強化を始めたチームだったこともあり、完成度は高いものでした。さらに今大会はこれまで女子のアジア地域の大会では見られなかった、中東各国からの多くの参加があり、今後の勢力図の変化をも感じさせるものとなりました。特に、イランはヨーロッパから監督を招聘し、強化を始めたこともあり、中東をリードする強豪国になる日も遠くないと感じております。また、中央アジア勢はこれまでカザフスタンだけが強豪チームでありましたが、今大会第2戦で対戦した、ウズベキスタンはこれまでとは見違える様な力を有しており、今後はしっかりとした対策を持って戦わなければならないことは間違いありません。その他にも北朝鮮も底力のある不気味な存在であり、アジアの女子のハンドボールは、大きく変貌を遂げていることを強く認識させられました。

このような状況を確認し、今後の我々の強化方針を骨太のものに仕立て上げ、地道な努力とともに、一つ一つを意義深いものにしなければなりません。概要と致しましては、前回もご報告させて頂きましたように、機動的なハンドボールの展開は必須です。アジア地域においては、日本チームより体格が劣るチームは既にございません。特に高さについては圧倒されていると言っても過言ではありません。その実情に対抗するには、攻防にわたり機動的にゲームを展開することはさけられません。ゲーム構想に適したフィットネス作り、そして判断力豊かなパフォーマンスの実現を目指したい所存です。そのためには、選手個々が自立することがキーワードであろうと、スタッフ全体として認識致しております。

今大会を終えて、もう一つ皆様方にお伝えしなければならないことがございます。オーバーステップに関するジャッジの厳しさが、これまでの国際大会とは段違いなものでありました。東アジアの韓国や日本は、「これもオーバーステッ

プ？」と首を傾げざるを得ない様な場面も多々あり、大会を通して混乱を招いていたと思います。少し具体的に申し上げますと、継ぎ足をしたようなステップや、3歩以内のように思えても切り返し後にステップを複数踏んだ多くの場合において、オーバーステップをジャッジされることが多くうかがえました。ドリブルからの入りのステップに対するジャッジの厳しさは、言うまでもありません。これらはレフェリーミーティングで、相当の時間をかけて伝達されたことであるとも伺っております。今後、日本がどのように対応していくか、強化全体の課題として、しっかり対応しなければならないと思います。少なくとも各カテゴリーのナショナルレベルのプレーヤーは、日常から習慣化させなければならない課題と感じています。

最後になりますが、現時点からアジアナンバーワンになるために、全身全霊で臨むことを再度お約束し、皆様方へのご報告とさせて頂きます。

アジア選手権大会報告

日本代表女子チームキャプテン　髙橋　恵

2012年5月、黄監督の下ロンドンオリンピック出場を目指し最終予選に臨みましたが、その道が途絶えてから6ヶ月。2016年リオデジャネイロオリンピックに向けて栗山監督の下、新たなナショナルチームでアジア大会に臨みました。

黄監督、以前の歴代の監督のいい部分を引き継ぎ、ナショナル選手としての在り方を大切にしながら「大人のチーム」であることを監督から問われて来ました。そういった雰囲気の中で、短い国内合宿期間で多くコミュニケーションをとりチームとしての骨格を作り上げていきました。

大会が始まり、予選リーグ一番の山場だったカザフスタン戦も勝利しグループ1位で中国との準決勝へ進みましたが敗戦。世界選手権の出場権がかかった三位決定戦に進むこととなりました。

カザフスタンとは予選リーグでも戦っていましたが、出場権がかかった試合だったので、予選リーグよりも苦しい立ち上がりでした。それでも全員で我慢して我慢して、一点差で出場権を勝ち取ることができました。

今回の大会で出た課題もありますが、若い選手も多くコートに立つ中で、接戦をものにできたことはチームとしても自信になりました。なにより、新体制にも関わらずこれだけ短い準備期間で大会に臨み、結果を出せたことは価値のある勝利だと思います。

インドネシアでは日本人会の方が会場に足を運んでくださったり、大使館の方が滞在先まで激励に来て下さいました。

国内合宿でも大学生や男子高校生に相手をして頂きました。たくさんの方々に力を借り応援していただき本当に感謝しています。ありがとうございました。

リオデジャネイロに向けてチームは始動したばかり。2015年オリンピックアジア予選に照準をあて、必ずアジアNo.1になる為に日々取り組んでいきます。

戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評　戦評

12月7日（金）：予選ラウンド1

日本　69（39-1，30-0）1　クウェート

栗山監督新体制となり、初めての国際マッチとなったアジア選手権大会、初戦はクウェートとの対戦となった。

前半、日本は初戦の固さもなくスムーズに入り、クウェートOFの芽を摘み速攻へつなげ序盤から圧倒する。中盤以降もペースは変わらず得点の9割以上を速攻で積み重ね、前半を39対1で折り返す。

後半も日本のペースは変わらず、大学生で初参加となった原も落ち着いたプレーをし、得点を量産する活躍をみせる。後半の30分は一度も相手にチャンスを与えることなく、クウェートに69対1で勝利。

[個人得点] 原：13点、田邉：12点、勝連：9点、石野：8点、横嶋：6点、上町・前田・後藤：5点、髙橋：3点、稲葉：2点、藤井：1点

12月8日（土）：予選ラウンド2

日本　31（20-13，11-14）27　ウズベキスタン

前半、日本は髙橋のサイドシュートで幸先よくスタートを切る。中盤までは日本ペースで試合が進むが、そこからウズベキスタンの左エース5番に苦戦し始める。ポストをからめたOFに後手にまわってしまい同じ失点を繰り返してしまう悪い展開となる。しかし終盤日本の機動力が息を吹き返し連続得点を奪い、前半20対13で折り返す。

後半立ち上がりから日本は、よく足を使い相手OF陣の出足を止めると速攻につなげ9点差まで点差をつける。しかし、ここからサイドシュートがことごとくラインクロスの判定が続き、リズムを狂わせられる。中盤、3点差まで詰められる局面まで追い込まれる。ここが踏ん張りどころの日本は、タイムアウトを取り落ち着きを取り戻すと終盤連続得点を重ね、31対27で勝利。

[個人得点] 勝連：7点、髙橋：6点、藤井：5点、横嶋：4点、

後藤・東濱：３点、石野・田邉・永田：１点

12 月 9 日（日）：予選ラウンド 3

日本　48（23-11，25-7）18　インド

前半序盤から日本は、DF で機動力を活かし厳しい当りでインド OF 陣の足を止める。そこから速攻・セット OF で着実に得点を重ね前半 10 分過ぎに 10 対 3 とリードを奪う。中盤、インドの 4 番エースの強引なプレーに対して後手に回ってしまい得点を許してしまう。しかし点差を詰めるにはいたらず 23 対 11 で折り返す。

後半に入っても、日本 DF は厳しい当りはかわらずインドは攻め手に欠き、日本ペースで進み得点を量産する。中盤、相手に連続得点を許す局面があったが、日本の優位は変わらず 48 対 18 で勝利。

［個人得点］田邉：9 点、上町・藤井・勝連・原：5 点、高橋・横嶋：４点、稲葉・石野・東濱：３点、前田：２点

12 月 11 日（火）：予選ラウンド 4

日本　37（21-4，16-4）8　トルクメニスタン

前半立ち上がりからトルクメニスタンは藤井にマンツーを仕掛けてくる。しかし日本はあわてることなく、広い 5 対 5 をシンプルに攻撃し得点を重ねていく。DF では足を使い相手チームのキーマンである 7 番・17 番を徹底的に守り失点を許さない。5 分過ぎ 5 対 0 となったところで相手チームがタイムアウトを要求。中盤以降も日本のペースは変わらず 25 分過ぎ 19 対 2 とリードを奪う。終盤日本は DF で集中力が欠けたプレーで失点する場面があったが 21 対 4 で前半を折り返す。

後半、前半同様藤井にマンツーを仕掛けてくるが動じることなくテンポよくボールを回し点差を広げていき 12 分過ぎ 29 対 5 となる。中盤メンバーを入れ替えたところで DF の連携ミスによる失点があったものの大勢に影響はなく、終盤も着実に点差を広げ 37 対 8 で終了。

［個人得点］横嶋：6 点、勝連・後藤：5 点、上町：4 点、高橋・藤井・田邉：3 点、石野・永田：2 点、稲葉・前田・東濱・原：1 点

12 月 12 日（水）：予選ラウンド 5

日本　27（11-12，16-11）23　カザフスタン

勝てば予選リーグ 1 位通過が決まる試合は、前半からカザフスタンペースで始まる。日本 DF は 9 番の選手に真ん中を自由に突破され足を活かした DF がなかなか機能せず、4 分過ぎ 1 対 4 となったところでたまらずタイムアウトを要求。タイム後日本は 9 番にマンツーを仕掛け揺さぶりにかかると、徐々にペースは日本に傾く。しかし OF でのノーマークミスが続き点差を詰めることができない。10 分過ぎ 3 対 6 の場面で今度はカザフがタイムアウトを要求。これが逆に日本のリズムを呼び、連続得点で点差を詰めにかかる。21 分過ぎ横嶋が退場となるが、ここで 7m スローを藤間がファイセーブし、流れを渡さない。25 分過ぎにようやく 10 対 10 と同点に追いつく。終盤 2 連続得点を許すが 1 点返し 11 対 12 で前半を折り返す。

後半、日本は 3 分 13 対 13 と同点に追いつく。ここから一進一退が続くが、9 分カザフの中心選手である 9 番が 3 回目の退場でレッドカードとなる。ここで日本はリズムを掴むと、11 分 18 対 14 と突き放しにかかる。しかしカザフも粘りを見せ中盤 3 点差 4 点差を行き来する緊迫した試合展開となる。20 分 23 対 18 と初めて 5 点差とすると、終盤まで互いに点を取り合い 27 対 23 で終了。

［個人得点］東濱：7 点、藤井：6 点、横嶋：4 点、高橋・稲葉：３点、上町・原：２点

12 月 14 日（金）：準決勝

日本　25（12-13，13-15）28　中国

勝てば世界選手権出場が決まる試合は、前半から 1 点を争う緊迫した試合展開となる。日本 DF はポスト厚く守るシステムで中国に対応し、OF では機動力を活かし揺さぶりからチャンスを狙うスタイルで中国 DF を崩しにかかる。中盤まで、1 点差を行き来する展開が続いたが、23 分過ぎ日本が連続得点で 11 対 9 と初めて 2 点差としたところで、中国がタイムアウト。タイム後、落ち着きを取り戻した中国に、3 連続得点を許してしまい 27 分 11 対 12 と逆転を許してしまう。29 分横嶋のポストプレーが 7m スローとなり、これを藤井がきっちり決め 12 対 12 の同点。しかし終了間際ロングを決められ 12 対 13 で前半を折り返す。

後半、立ち上がりから中国にロングを立て続けにハイコーナーに決められるが、日本もクイックスタートで応戦し序盤一進一退の攻防が続く。しかし 11 分過ぎから中国に連続得点を許してしまい、13 分過ぎ 19 対 23 と 4 点差をつけられたところでタイムアウトを要求。タイム後 1 点返し、反撃に出たいところであったが日本の足が止まりだし OF での単調な仕掛けやミスが重なり 4 連続失点をしてしまい 20 分 20 対 27 と引き離されてしまう。終盤、日本も追いすがるが 25 対 28 で終了。

［個人得点］藤井：8 点、東濱：5 点、高橋：4 点、横嶋・勝連：３点、上町・稲葉：１点

12 月 16 日（日）：３位決定戦

日本　21（7-8，14-12）20　カザフスタン

勝てば来年の世界選手権出場が決まる一戦は、前半カザフペースのスタートになり、リーグ戦同様追う展開となった日本は、カザフのキーマン 9 番にマンツーを仕掛ける。しか

しポストに連取され 7 分 1 対 3 となる。日本は OF でのミスが目立ちなかなか得点を奪えず苦しい展開が続いたが、この日スタメンの飛田が好セーブを連発しロースコアな展開になる。13 分過ぎ 3 対 6 となったところから互いに得点が奪えず、重くるしい時間帯が続く。ここで抜け出したい日本だったが、逆に OF ミスから速攻で失点をしてしまい 22 分 3 対 7 とされてしまう。離されたくない日本は藤井のロングで 4 対 7 とすると、その後 1 点返されるが終盤連続得点を奪い 7 対 8 で前半を終える。

後半、OF スタートの日本は速い展開からサイドにずらしきっちりと高橋が決め、8 対 8 と同点に追いつくと、そこから一進一退の攻防が続くが、6 分過ぎ左サイドの田辺がシュートを決め 10 対 9 とこの試合初めてリードを奪う。15 分に連続得点で 14 対 11 とさらにリードを広げると、そこから 3 点 4 点差を行き来する展開が続く。しかし 22 分過ぎ東濵が退場となり、この間に差を詰められ 24 分 19 対 17 とされる。踏ん張りたい日本は、後半も絶好調の飛田が好セーブで流れを呼ぶと、東濵が勝負所でシュートを決め、差を広げ 27 分 21 対 17 とする。終盤カザフの猛追があったが 21 対 20 で逃げ切り終了。

[個人得点] 東濵：8 点、藤井：4 点、髙橋：3 点、上町・田邉：2 点、稲葉・石野：1 点

第 14 回女子アジア選手権に参加して

本田昭太　田渕元雄（審判・神奈川）



今回、第 14 回女子アジア選手権大会に参加する為に、12 月 5 日～ 12 月 17 日までインドネシアのジョグジャカルタへ行ってきました。今回は初めてシニアレベルでのアジア選手権への参加だったので、期待と緊張の入り交ざった独特な感覚に包まれていました。大会参加レフェリーは、イラン・クウェート・韓国・UAE・バーレーンと私たち日本の 6 ペアでした。そのうち 3 ペアがインターナショナルレフェリー、残りの 3 ペアがコンチネンタルレフェリーでした。私たちを含めて、コンチネンタルレフェリー 3 ペアは IHF・GRTP に参加している若手のレフェリーでした。

今回のアジア選手権では 2 日前に現地に入り、講習会を行いました。内容はルールテストに始まり、各現象（オーバーステップ、オフェンスファール、段階的罰則など）の映像をペアごとに渡され、その判定に対しての各ペアの見解を求められるものでした。自分たちの見解を述べるのと同時に、皆でディスカッションをするものが主となりました。一方的に話を聞き、指導を受けるのではなく、皆で積極的にコミュニケーションを取りながら進めていくスタイルは、大会を迎えるレフェリー団を、1 つのチームとしてまとめる上で、非常に有効的なスタイルだと感じました。

試合は 1 日に 6 試合あり、順位決定戦までは毎日割り当てがありました。私たちは、全部で 8 試合を担当させていただき、順位決定戦では、5・6 位決定戦を担当しました。今大会を通じて、AHF・PRC から注意して言われていたことは、オーバーステップの基準、段階的罰則と一発退場の見極めについてでした。特に、オーバーステップに関しては、映像を交えながら一つひとつ AHF・PRC から解説がありました。

最後になりますが、この度、私たちがアジア選手権に参加させていただけたことは、職場の皆様、また、多くの関係者の皆様の多大なるご支援があったからだと強く感じております。ありがとうございました。これからも初心を忘れず、日々精進していこうと思います。そして、日本のハンドボール界、レフェリー界へ恩返しが出来るような人格を培い成長していきたいと思います。今後とも御指導を宜しくお願い致します。





高松宮記念杯男子第 55 回・女子第 48 回

平成 24 年度 全日本学生ハンドボール選手権大会

最終順位

【男子】
優　勝：日本体育大学（関東）
準優勝：早稲田大学（関東）
3　位：大阪体育大学（関西）
　　　　中京大学（東海）

【女子】
優　勝：大阪教育大学（関西）
準優勝：大阪体育大学（関西）
3　位：東海大学（関東）
　　　　東京女子体育大学（関東）

個人表彰

【男子】
■優秀選手賞
GK　木村昌丈（日体大）
CP　元木博紀（日体大）
CP　藤江恭輔（日体大）
CP　久保龍太郎（早稲田）
CP　牧山仁志（早稲田）
CP　植垣健人（大体大）
CP　野村浩輝（中京大）
■特別賞
CP　石橋　龍（日体大）
GK　岩下祐太（早稲田）
■最優秀監督賞
松井幸嗣（日体大）

【女子】
■優秀選手賞
GK　板野有希子（大教大）
CP　乾　彩友美（大教大）
CP　平良紫野（大教大）
CP　松村杏里（大教大）
CP　角南　唯（大体大）
CP　河田知美（大体大）
CP　松尾祐依（東女大）
■特別賞
GK　坂田知英美（大体大）
CP　川村杏奈（東海大）
■最優秀監督賞
土井秀和（大教大）

総評　「全日本学生ハンドボール選手権大会」を振り返って

九州学生ハンドボール連盟理事長　三輪 一義

11 月 14 日から 18 日まで、全国の男子 253 チーム・女子 123 チームから勝ち抜いた男子 32 チーム・女子 24 チームが参加し、福岡県福岡市のアクシオン福岡をメイン会場として『全日本インカレ』が開催されました。8 年ぶりの九州地区開催、24 年ぶりの福岡県開催ということもあり、地方開催ならではの "おもてなし" の気持ちを心掛けて大会運営に努めましたが、大会会場が 4 会場に分散したこともあり、選手・観客の皆様には本当にご不便をお掛けしたことと思います。

今大会では例年と大きく異なった点が 2 つありました。「1 回戦からのドーピングコントロール」と「GRTP（Global Referee Training Program）」です。

ドーピングコントロールは、昨年の花巻インカレでも実施されていますが、今大会は 1 回戦からの実施となりました。そのため、日本協会アンチ・ドーピング特別委員会と協力しながら、選手・役員に対する事前啓蒙や実態調査を行うとともに、代表者会議でも説明時間を設ける等、運営側としても "うっかりドーピング" を含めた事象発生防止に努めました。ただ、選手・役員のドーピングコントロールに対する絶対的な経験不足・知識不足は否めず、今後の更なる啓蒙活動が不可欠であるとの指摘もあり、今後の学生ハンドボール界における対応を考える機会となりました。佐久間克彦先生、貝沼圭吾先生はじめ、アンチ・ドーピング特別委員会の方々にはいろいろとお世話になりました。ありがとうございました。

GRTP は、国際ハンドボール連盟（IHF）が世界各地で開催する国際レフェリー認定のための検定試験であり、開催国の全国レベルの大会を対象として行われるものです。今回、アジア 8 カ国から女性 2 ペアを含む 8 ペアがノミネートされ、大会 1･2 回戦の 36 試合中 24 試合を担当することになりました。レフェリーには日本語が通じないため、トスやユニフォームチェックや選手確認等は、その試合のマッチバイザーが代行するなど、通常とは違う試合準備形式となりました。特に、イランからノミネートされた女性ペアの試合では、宗教上の問題から髪や肌など全身を覆ってのレフェリー姿となり、日本では見ることができない服装でのゲームとなりました。海外レフェリー 8 ペアによる吹笛が初の試みとなったことから、様々な問題も発生し、運営側の至らなさから各方面にご迷惑をお掛けすることになったことを大変申し訳なく思います。また、日本協会審判部の方々にもいろいろとご不便をお掛け致しましたこと、誌面を借りてお詫び申し上げます。

大会は、福岡県精華女子高校吹奏楽部のマーチングによる歓迎アトラクション、出場全 56 チームの入場行進、福岡大学・高良耕平男子部主将と福岡大学・中満千晶女子部主将による選手宣誓を経て、5 日間に渡る大学シーズンの集大成となる 54 試合がスタートしました。男女共に 1 回戦から接戦・熱戦が続きましたが、男子ベスト 4 には 11 年連続の進出となる日体大、3 年連続の早稲田大、6 年ぶりの大体大、11 年ぶりの中京大が勝ち上がり、女子ベスト 4 には 10 年連続の大教大、4 年連続の大体大、3 年ぶりの東女大、初進出の東海大が勝ち上がりました。決勝戦は男女共に昨年と同一カードとなり、男子は日体大 vs. 早稲田大の関東対決、女子は大教大 vs. 大体大の関西対決となりました。大激戦の末、男子は日本体育大学が、女子は大阪教育大学が優勝を飾り、大会が閉幕しました。

連日大変多くの観客の方々に応援頂き、2000 部準備した大会プログラムも 3 日目には完売してしまう程の大盛況となりました。また、決勝戦のインターネットによるライブ動画配信では、全国で 4,000 人を越える愛好者の皆様にも観戦頂きました。

大会開催にあたり、多大なご支援を賜りました日本協会、全日本学生連盟、福岡県協会、協賛各社には心から御礼申し上げます。また、全国各地から応援にお越し頂いた保護者の皆様、ハンドボール関係者の皆様には深く感謝申し上げます。来年度の関東ブロック開催は、山梨県甲府市を中心として開催される予定です。大会の成功をご祈念申し上げます。


写真提供：スポーツイベント社

男子優勝：日本体育大学

全日本インカレを優勝して

日本体育大学男子ハンドボール部主将　平子 卓人

平成24年11月13日から18日まで福岡県で行われた全日本学生ハンドボール選手権大会で優勝、二連覇できたことを大変嬉しく思っています。私が、2年生の時に決勝戦で1点差で負けたという悔しい思いをしていたので、二連覇したことに満足しています。

今年は、春季・秋季リーグ戦では優勝したものの、春季リーグでは筑波大学に負けていることや、主将の私自身が怪我をしてしまい、多くの不安材料がありました。4年生を中心に皆がリーダーシップを取り、意識を高く持って練習に取り組みチームを引っ張ってくれたことで、チーム全体が一つにまとまり、それが今年のチームの強みにもなりました。また、絶対的なエースがいないと言われていたことで、「みんなで1点を取る」という意識が高かったのもチームワークを高めることのできた要因でした。

また、日体大の「走るハンドボール」を徹底するために、春合宿や夏合宿を中心に、一年間を通して他の大学に負けないくらい走りのトレーニングを行い、新たに体幹トレーニングも取り入れた、例年以上に苦しい練習を皆で乗り越えてきました。しっかりと積み重ねてきたものがあったからこそ、一人一人が自信を持ってリーグ戦やインカレに臨めました。その結果、春季・秋季・インカレ優勝という結果に繋がったと思います。

私は、4年生最後の学年で主将を務めさせて頂き、優勝できたことをとても誇りに思っています。優勝できたのは他の4年生を始めチーム全員、ご指導してくださった松井先生、コーチ、トレーナー、今日まで支えてくれた保護者の温かい応援、日体大の関係者の皆様のお陰だと思っています。本当にありがとうございました。そして、後輩達には今後も目標を高く持って努力を惜しまず、精進して欲しいと願っています。

男子決勝戦［日本体育大学×早稲田大学］より　（写真提供：スポーツイベント社）





写真提供：スポーツイベント社

女子優勝：大阪教育大学

インカレ優勝に思う —チームを支えてくれた皆様への感謝とともに—

大阪教育大学女子ハンドボール部監督　土井 秀和

選手・マネージャー 26 名とスタッフ 4 名で臨んだ福岡インカレ。最後に劇的なフィナーレが待っていました。残り 2 秒、渾身のポストシュートで我々に勝利の女神が微笑んでくれました。

初優勝した大阪インカレで、終了間際の同点シュートで追いつき、延長戦で勝利した光景を思い出しました。

試合の開始からずっとシーソーゲームで、お互い何度リードしたり、されたことか。

私が今まで経験した試合の中でも、中々お目にかかれない好試合でした。お互い気力が満ちあふれ、最後の最後まで集中心を失わず、勝利目指して頑張った素晴らしい試合でした。

終盤、終了 3 分前に 2 点リードされたときには、正直難しくなったと思いましたが、選手たちが諦めずに戦ったことが、最後の逆転につながったのでしょう。改めて、勝負事は絶対諦めてはいけないことを教えられました。

3 年連続決勝で顔を合わすことになりました。シーズン当初から決勝の相手は大阪体育大学と選手に言い聞かせ、トレーニングに励んできました。

相手のスピードに負けないように、走り込みに力を入れたり、攻撃や防御のレパートリーを増やすなど、絶えず相手を意識したトレーニングでした。

このインカレを迎えるにあたり、最後にけが人が出たことは悔いが残りますが、部員全体でカバーできたことにほっとしています。

最後に、選手を励まし支え続けてくれた保護者の皆様、OG 諸君、決勝戦に夜行バスやフェリーを乗り継いで駆けつけてくれた学生諸君に、心から感謝申し上げます。

女子決勝戦［大阪教育大学×大阪体育大学］より　(写真提供：スポーツイベント社)



戦　評

男　子

【準決勝】

日本体育大学　36（20-15･16-19）34　大阪体育大学

開始早々、クイックスタートの応酬で、お互いにセット攻撃にならない超高速ハンドボールが展開されるゲーム様相となった。前半 10 分で 7 対 7、15 分で 10 対 9 とがっぷり四つに組む東西の雄同士の見応えあるゲーム内容であった。ここから日体大が 4 連続手得点で主導権を握ったかに思えたが、大体大も 3 連続得点と盛り返し、白熱の展開を見せる。しかし、ここで日体大にエンジンが掛かり、前半を 20 対 15 と折り返す。後半立ち上がり大体大が怒濤の 5 連続得点で、ゲームの行方がわからなくなり、お互いの連続得点で一進一退の息詰まる戦い。残り 4 分の 33 対 31 からも、大体大の 3 連続、日体大の 3 連続、大体大の 3 連続得点と、激動の展開の末、日体大が 36 対 34 で辛くも逃げ切る。

早稲田大学　35（20-11･15-17）28　中京大学

立ち上がり 5 分で 5 対 1、15 分で 12 対 4 と、早稲田大にとっては好スタートを切れたゲーム展開に。一方、中京大にとっては予想外の苦しい展開に。その後も早稲田大の勢いは止まらず、23 分で 16 対 10 と 10 点差に。少しでも差を縮めて後半を迎えたい中京大だが、早稲田大も効率よく得点を重ね、20 対 11 で折り返す。後半には中京大・野村の 7 得点で何とか食い下がり、後半だけみれば 17 対 15 の 2 点リードであるが、前半の 9 点ビハインドは如何とも大きく、35 対 28 で早稲田大の完勝。前半からメンバーをどんどん入れ替えて、全員ハンドボールで勝ち取った地力に勝る早稲田大の勝利であった。

【決勝】

日本体育大学　31（11-10･20-13）23　早稲田大学

日体大の前半 11 点の内訳は、元木 6 点、福田 2 点、会田・石橋・平子 1 点。対する早稲田大の前半 10 点の内訳は、牧山 3 点、久保龍・山田 2 点、久保二・東江 1 点。元木にボールを集める日体大と全員ハンドを仕掛ける早稲田大。決勝戦に相応しい前半の戦いとなる。後半最初の得点は早稲田・久保二で同点になるものの、ここから日体大が 5 連続得点で試合の主導権を握る。ここで早稲田はタイムアウトにより流れを取り戻そうとするが、日体大・木村が 7mT を 2 本連続でシャットアウトし、流れを渡さない。結局、この後半 10 分までの攻防がゲームを決めた格好になり、31 対 23 で日体大が 2 年連続 22 回目の優勝を飾る。

女　子

【準決勝】

大阪体育大学　31（15-12･16-8）20　東海大学

立ち上がり 4 分 29 秒で大体大が、8 分 14 秒で東海大が、それぞれタイムアウトを請求したことに象徴されるように、激しいゲームの主導権争いがこの試合に賭けるベンチの意気込みを表していた。東海大は前半で 3 枚のイエローカードが出るほど激しい DF で何とか食い下がろうとするが、大体大・河田の前半 9 得点の活躍も光り、大体大が 15 対 12 で前半を折り返す。後半立ち上がりもペースを崩さない大体大に対して、東海大は 5 分 02 秒に 2 回目のタイムアウトで立て直しを図ろうとするも、大体大の勢いを止めることが出来ない。終盤に深田の連続得点で粘りをみせるが、31 対 20 で大体大が決勝進出を決める。

大阪教育大学　33（18-11･15-13）24　東京女子体育大学

前半 10 分までに 8 対 1 と大教大の一方的な展開で進むものの、東女体大も 20 分までに 13 対 8 と立て直す。しかし、タイムアウトにより落ち着きを取り戻した大教大は、連続 4 得点でリズムを取り戻し、前半を 18 対 11 で折り返す。後半立ち上がりは一進一退の攻防が繰り返されるが、5 分過ぎから東女体大の 5 連続得点で 23 対 18 の 5 点差と迫る。しかし、ここでの効果的なタイムアウトにより、大教大が 3 連続得点と突き放す。東女体大・陣野の 9 得点も実らず、結局 33 対 24 で試合終了。エースに頼らず、どこからでも得点できる総合力が勝利の要因となった試合であった。

【決勝】

大阪教育大学　28（15-13･13-14）27　大阪体育大学

前半 5 分までに 4 対 1 と主導権を握るかに見えた大体大だが、タイムアウト後に落ち着きを取り戻した大教大が 4 連続得点でゲームを五分に戻し、決勝戦に相応しい展開となる。15 分までに 9 対 7 とリードした大体大だが、大教大は 3 連続手得点で流れを引き戻し、26 分からの 12 対 13 の 1 点ビハインドの展開も、7mT 2 本を含む 3 連続得点で 15 対 13 の大教大 2 点リードで折り返す。後半はお互いのリードが 2 点差になることが一度もない、手に汗に握る一時たりとも目が離せない緊迫したゲームとなる。27 対 27 で迎えた残り 39 秒で大体大がタイムアウトを請求し、戦術を確認して最後の攻撃を仕掛けるが、シュートが枠を捉えず、会場中の誰もが延長戦を意識した 29 分 59 秒に大教大のポストシュートが決まり、インカレ決勝戦の歴史上に残る大激戦に幕が下りた。大教大は 2 年ぶり 2 回目の優勝となる。

小樽商科大学

小樽商科大学男子ハンドボール部　菱村 祐樹

創部 51 年目にして初出場

全日本学生ハンドボール選手権大会出場が決まったとき、喜びというよりも、信じられないという気持ちの方が強くありました。それまで、まさか自分たちが"全国大会"なるものに出場できるとは思っていなかったからです。

小樽商科大学男子ハンドボール部は 1962 年に創部され、これまでに数回、東日本インカレに出場した経験があります。しかし、一時期は部員数が足りず満足に試合ができなくなり、北海道学生リーグで 3 部まで降格したこともありました。

2009 年に私が入部したときは 2 部リーグからのスタート。大学からハンドボールをはじめた人が多く、監督などしっかりした指導者がいないチームでした。私たちの部は名門や強豪と言われるものでもなければ、学校にスポーツ推薦もないため、ハンドボールが目的で入学・入部してくるということはあり得ません。また、監督がいない、キャプテンがいるとはいってもすべては部員同士のやりとり、ということもあって、ただ厳しくするだけでは辞めてしまう人も出てきます。「いかに楽しくするか」。これは、私が大学 4 年間で見てきたどの代でも実践されていたと思います。2009 年の秋には 2 部リーグで優勝、入れ替え戦にも勝利し、1 部リーグに昇格することができました。その後の 2010 年・2011 年も、1 部リーグの 3 ～ 4 位につくことができていました。

2012 年、もう今年で最後だという気持ちで臨んだ春季リーグ戦でした。しかし、結果は全敗で最下位の 6 位。これまで勝てていたチームにもすべて 1 点差で負けてしまいました。原因は、チームの主力である私たち 4 年生が、就職活動で冬から春にかけてあまり練習に出ることができなかったためです。その後、2 部優勝チームとの入れ替え戦をなんとか乗り切り、次の秋季リーグ戦ではまず 1 勝、そして 3~4 位に戻ることを目標に、夏の練習に励みました。

そして迎えた秋季リーグ戦。早い段階でチームが 1 勝できたこともあり、その後はチーム全員がきちんと実力を出せていたと思います。結果は 3 位。目標を達成することができました。今年度は北海道の出場枠が 3 つだったため、全日本インカレ出場も決定しました。春は全敗、秋は 1 つでも勝てれば良い方だと思っていたのに、まさかのインカレ出場。本当に信じられませんでした。

全日本インカレにむけて、チームの意気込みとしては「目指せ！全国 1 勝！」というのも勿論ありましたが、やはりチームカラーとして「試合を楽しもう」「自分たちのハンドボールをしよう」というほうが強くありました。試合結果は 39 対 16 と完敗でしたが、惨敗ではなかったように思います。試合開始から相手選手の全国レベルのプレーに圧倒されつつも、チームが暗くなったり、縮こまったりすることなく、伸び伸びとプレーできていました。全国のトッププレーヤーの試合を見るだけでもいい刺激になりますが、実際に試合することができて本当に良かったと思っています。

この経験を活かし、後輩たちにはこの先どういうチームを目指していくのか、またどのようにすればうちのような部員数を確保しにくい大学のチームが、より強くなれるかを模索していってほしいと思います。

最後になりますが、創部 51 年目にして全日本インカレに初めて出場することができたのも、これまで応援し支えてくださった方々のお陰です。ありがとうございました。

これからも小樽商科大学ハンドボール部をよろしくお願いします。



初出場チームのコメント

桐蔭横浜大学

桐蔭横浜大学ハンドボール部 **佐々木莉紗**

①部の創設の歴史



桐蔭横浜大学ハンドボール部は、2008年4月、桐蔭横浜大学にスポーツ健康政策学部が開設されたのを機に男子7名、女子1名でスタートしました。女子部は1年目スポーツ学部一期生の黒川真帆（文大杉並高校出身）が男子部にたった一人で混ざりトレーニングに励みました。翌年の2009年に現4年生の二期生が加わり正式に女子部創部となりました。大学やナショナル関係でコーチキャリアのある岡本先生の指導のもと男子部女子部とも日々厳しい練習に励んでいます。チームのモットーは「No Rain, No Rainbow. 虹が見たければ、雨を我慢しなくては」であり、目標である学生ハンドボール界のリーダーになっていくという高い志をもって、夢に向かって妥協せずに前進し、大きく美しい虹を皆で臨みたいと思い毎日活動しております。女子部のこれまでの成績は、初参戦で関東リーグ2部優勝を達成し、その後も努力を怠ることなく関東2部で連続優勝を果たし、2010年秋にはまだ2年目にして1部昇格を達成しました。4年目の今年は関東1部でも勝利することが出来、インカレに初出場となりました。

②大会初出場への抱負

創部4年目で初めての出場となる今回の全日本インカレに向けて、私たちはこれまで以上にミーティングを行い、士気を高め、チーム一丸となって練習に取り組んでいます。初出場ではありますが伝統や歴史ある他大学に負けない団結力で、メダルを目標に少しでも長くこのチームでプレーできるよう毎日全員が一生懸命汗を流しています。

たった1人で頑張られた卒部生の黒川先輩と共に歩んできたこの4年間の集大成として、今大会では私たちを支え応



援してくださった、たくさんの方々への感謝を表すとともに、今まで共に助け合い切磋琢磨し合ってきた仲間との時間を大切にして、29人の心を一つに精一杯プレーしたいと思います。そして私たちのチームモットーである No Rain, No Rainbow. の言葉のもと、今までで一番大きな虹をかけ、これまでの4年間をしっかりと締めくくりたいです。

③大会総括

大会は初戦から関西秋季リーグ3位の古豪武庫川女子大学との対戦となり、実績も経験もはるかに格上で、そのようなチームと対戦できることを喜びに感じました。試合は緊張から開始直ぐに0-4となってしまいましたが、そこから桐蔭らしく全員でDFし、速攻展開に持ち込み、逆転に成功する流れもできました。前半終了間際に押し込まれてしまい6点差まで離されてしまいましたが、後半最後まで決してあきらめず、全員で勝利を信じて戦いました。2点差まで詰め寄り、さらに勝負のスカイプレー…。綺麗に決まったかに見えましたがラインクロス。最後は涙が溢れながらのプレーとなりました。

毎日毎日夜遅くまで練習し、来る日も来る日もハンドボールの事を考え、大学生活のすべがハンドボールを中心軸に回った4年間でした。望んだ結果ではありませんでしたし、決して楽しいことばかりではなかったハンドボール生活でしたが、勝って泣き、負けて泣き、かけがえのない仲間と青春を情熱的に過ごせたことは、一生の宝物となり、今後も誇りとなって私たちの胸の奥に輝き続けると思います。来年も必ずインカレの舞台に立ち、勝利の涙を流せるよう、これからも努力を続けていきたいと思います。応援ありがとうございました。

清水新監督インタビュー



リオデジャネイロオリンピックを目指すナショナルチームとして、初めての合宿を行っている清水監督にインタビューをお願いした。

Q：声が掛ってから、やると決意するまでの経緯は？

A：受けることによって自分の人生が変化することが間違いなくて、自分の周りにいる人たちの協力がないと無理だということと、周りに及ぼす影響はどんなものか、といったことを始めは考えました。そして、周りの方が色々な意見をくれて、頑張ってみたらと言う声が多かったこと、そして、最終的には自分にしかできないことで日本のためになるのであれば、それは協力するべきだと思いました。少しでも日本のために、ハンドボール界のためにできることがあり、期待してもらえているならば出し切ろう、というのが最初の決意です。

Q：今、リオに向かってスタートして最初の合宿ですが、今一番思っていることは？

A：最初のテーマは、意識改革です。現状のまま、戦術と戦う準備だけして勝ちましょうといってもそれは無理な話なので、意識をどんどん変えていかないといけません。意識改革の1つとして、早朝からの4部練習があります。4部なんて阿呆じゃないかと思う人もいると思うのですが、それだけ現状では足りてないということを最初に意識させたくて、そこからスタートしているというのが今です。

Q：こういうチームにしていきたいという、チームの大きな構図は？

A：1つには、チームは1つの家族だということです。津川強化本部長がお祖父さんだとしたら、松井強化部長がお祖母さんで、私がお父さんで野村コーチがお母さん、選手みんなが子供ですよと。結束力のある家族の絆のようなものを、ジャパンのチームの絆として持ったチームを作っていきたいというのは、最初のミーティングで選手に説明しました。次に、ハンドボールをどう捉えるのかということで、もう1つの例えとして、ハンドボールの試合は戦いだと言いました。家族が今1つの戦艦に乗っていて、その中で、艦長が私で、指揮官が野村で、戦闘員が選手だと。戦艦が進んでいく上で、右に舵を切っているのに左に漕いでいる人がいたら船は進まないので、方針をきちんと理解して従ってもらいたいと言うことを伝えました。

Q：今回代表の合宿に招集したメンバーの選考のポイントは？

A：個々に能力を持った選手は、現状で他に何人かいると思います。ただ、ハンドボールはチームスポーツなので、その個人の技術がチームワークの中に融合した時にどんな力が出るのかということ、またその伸び代がその選手に後どれだけあるのかという将来性も考えました。3年後に一番良い状態に持って行き、チームと個人技が融合した時に、どういうパフォーマンスができるのかな、ということを現状で判断して集めたのが今回のメンバーです。ある程度何人か入れ替わることは在っても、ある程度幹となるであろうメンバーがここに集まっていると思います。

Q：最終的にはオリンピック出場が目標ですが、直近の当面の目標は？

A：年明けの1月にスペインに行かせてほしいということを提案させて頂き、スペインのカップ戦に出ます。1月の3、4、5、6日にゲームを行い、その後世界選手権の開幕も見させて頂く予定です。世界選手権の開催国であるスペインと今の日本でゲームをして、自分たちには何がどれだけ足りないのかということを感じさせたいです。次が、5月か6月の日韓戦です。10年間勝ててないという現状があるので、そこで韓国とどれだけの差があるのかをまず測りたいです。その後、日本リーグが始まる前の6、7、8月には長期間の合宿を計画しています。チームを一回鍛え上げて作り、国体と全日本総合の前にもう1回集合させ、2014年のアジア選手権が最初の大会になります。

Q：最後に、ハンドボールのファンに一言お願いします。

A：テーマとして「ネバーギブアップ」を掲げて、選手もチームもオリンピックを目指して動いています。ネバーギブアップで戦う姿、チャレンジする姿を通して、少しでもハンドボールの面白さを伝えて、夢や感動を与えたいと思います。そして早い段階で、男子もオリンピックのチャンスがあるんだなと感じてもらいたいと思います。華やかな綺麗なプレーではなくても、1つのリバウンドをとる姿勢とか、最後まで諦めない姿勢とかを見せて、ハンドボールを通して感動を伝えられたらと思います。



合宿の基礎練習を見学させてもらったが、随所で清水監督が檄を飛ばしており、合宿に対する気合いが伺えた。意識改革を掲げての合宿で、選手に対して思いを伝えようとする清水監督の気持ちが伝わってくる厳しい練習であり、見ているだけでも身が引き締まる思いであった。オリンピック出場を目指して動き始めたナショナルチームに期待したい。



期待の 87 年組に聞く

左から 樋口睦（湧永）、棚原良（大同）、甲斐昭人（車体）、石川出（大崎）

リオオリンピックを目指すナショナルチームで、中心となることが期待される 1987 年生まれの選手達。彼らに、今の気持ちを聞かせてもらった。

Q：新監督になって初めて招集されたわけですが、その時の思いについて聞かせてください。

樋口：正直嬉しかったですし、メンバーも世代が変わっていて、4 年後を見据えたメンバーだと思ったので、遣り甲斐があるなと思いました。

棚原：全日本のチームとしては、オリンピックに全然出場できていないので、オリンピックに行くという快挙に自分たちが貢献したいな、という思いがあります。個人的には、怪我から復活して、久しぶりに全日本に選ばれて、同級生の日体組の（石川）出や甲斐とも久しぶりに同じチームとしてやるので、すごく楽しいなと思いました。

甲斐：やはり代表に選ばれることをずっと目標にしてハンドボールをやってきたので、声がかかったときはもちろん嬉しかったです。ロンドン予選で負けた後、次は僕らの代が引っ張って行くんだということは、声が掛かる前から思っていたので、僕らの代で引っ張っていけるように頑張りたいと思っています。

石川：本当にリオに向けて始まるんだなあ、という思いが第一で、（甲斐）昭人も言った通り、この代で引っ張っていかないといけないという思いがあります。

Q：ご自分のアピールポイントとしては、どういうところを見てほしいですか？

樋口：外国人の大きな相手には、あまり点を取ることでは貢献できないと思うので、如何に良い状況で他の選手に打たせるか、チャンスを作れるかということで、プラスワンを作るということをしていきたいと思います。

棚原：僕は、やはり点を取ってほしいというのが監督の意向なので、点数をひたすら取るということと、苦しい時こそ周りを使って、ずらして決めるというアシストプレーも考えて、アピールしていきたいと考えています。

甲斐：僕はキーパーなのですが、自分で自信があるところとして、勝負所で特に集中してセーブして、流れを変えるプレーを何時も考えながらやっていますので、チームを勝ちへ持っていくキーピングというのをアピールしていきたいです。

石川：僕は招集される前から、ずっとチーム最優先に考えるということを思っています。招集されたときに、清水監督もそういう考えで、考えはすごく合っていると思うので、それを徹底してやって、チームに貢献して全力でプレーしていきたいです。加えて、たぶんゲームコントロールを求められていると思うので、そこを頑張っていきたいなと思っています。

Q：合宿が 1 週間程度終わって、新監督の合宿はどのような感想をお持ちですか？

樋口：自分のチームよりはるかにきつくて、体力的に厳しいです。求められていることが高いのですが、逆についていこうという気持ちになっています。

棚原：チームで清水さんが監督の時からやっているので、練習としては普段やっているようなことなのですが、周りがすごくレベルが高い選手なので、それに応じて清水さんもレベルの高い要求をどんどんするので、すごく質の高い練習ができています。自分としてもチームとしてもどんどんレベルが上がっていっているのではないかと思います。

甲斐：僕は体力的に自信がなくて、ついていくのに精一杯な状況ですが、やはり今までこのきついことから逃げていた部分もあったのかなと思っています。最初に合宿が始まったときはきつかったですが、考え方も少しずつ変わって、やるしかない、と覚悟を決めてやっています。

石川：大崎とは全く違うハンドボールスタイルなのですが、考え方は全く一緒なので、体力が無いのできついというのが第一に出てくるのですが、その中でも頭を使ってできるようにしていきたいなと思っています。

Q：最後に、みなさんがいずれリオの時の中心メンバーになられると思うのですが、これからのナショナルとしての試合にどういう気持ちで臨むのかといったことを含めて、意気込みを聞かせてください。

樋口：自分はまだ国際試合の経験がないので、とりあえず経験してみたいなと思っています。リオに向けては、僕らの世代で今は 4 人いて、もともとはライバルで、敵同士で、今も日本リーグでは敵同士ですが、ナショナルの時だけは心強いチームメイトなので、力を合わせてオリンピックに出たいと思います。

棚原：僕はこの全日本チームのエースになって、みんなに認められるプレーヤーになり、勝負所を任せてもらえる、苦しい時に助けてあげられるプレーヤーになりたいと思っています。そしてリオに必ず行きたいと思っています。

甲斐：僕はこの間の予選でコートに立った瞬間、日の丸の重みとか、プレッシャーとか怖さを感じてしまって、結果を残すことができなかったので、この 4 年間でしっかり成長して、周りから聞こえてくる色々な声も跳ね返して、4 年後必ずオリンピックに出ます。

石川：まだ始まったばかりで、このチームで他のチームとやったことがないので、どうなるかわからないのですが、しっかりリオに向けて、これからこのメンバーで誰も怪我などで欠けることなく、リオに向けて頑張りたいと思います。

自分達が新しいナショナルチームの中心として、チームを引っ張っていくのだという気概が見られ、大きなエネルギーを感じた。長年の悲願であるオリンピック出場に向けて歩き始めた彼らに、今後も注目したい。

東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会、IOCに立候補ファイル提出

東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会は、2013年1月7日、14項目から成る立候補ファイルを国際オリンピック委員会（IOC）本部（ローザンヌ）へ提出した。（以下は、立候補ファイルからの抜粋）

動機とビジョン

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、世界で最も先進的で安全な都市の一つである東京の中心で、ダイナミックなスポーツの祭典とオリンピックの価値を提供する。

東京大会の基礎となるのは：

- 高い質と最高の恩恵が保証される大会開催
- ダイナミックさと温かい歓迎で世界中の若い世代に感動を与える祭典
- 日本が誇る創造力とテクノロジーを駆使し、スポーツとオリンピックに寄与する革新性である。
- 2020年東京大会を通じて、世界のスポーツ界が**「未来をつかむ（Discover Tomorrow）」**ことができる。
- 東京大会は、革新性とインスピレーションを結び付け、オリンピックの価値、スポーツや、オリンピック・ムーブメントがもたらす広範な恩恵とレガシーを示すものとなる。
- 私たちは、大会が持つ力を、日本人が持つ独自の文化や資質、そしてグローバルなトレンドを生み出す都市の興奮に結びつける。
- 私たちは、記憶に残るダイナミックな大会を開催し、新しい世代のために、オリンピック・パラリンピックの価値を強化し、世界中のより多くの若者が夢と希望とスポーツの恩恵を分かち合えるよう支援していく。

私たちは、オリンピック・ムーブメントの影響力と、スポーツの持つ癒し、団結させ、鼓舞する力、東京が誇る革新性と運営面での効率性を結びつけ、東京、日本、そしてスポーツのために永続的なレガシーを提供することに情熱を傾けていく。

東京は、卓越、友情、尊敬という基本的価値をオリンピック・ムーブメントと共有する都市である。私たち日本人は2011年3月の東日本大震災に直面し、これらの価値観や、尊厳、規律、フェアプレーといった資質を示してきた。2020年東京大会はこうした価値観や資質を受け入れるとともに、一層高め推進するものになる。

会場の概要

東京は大会のコンセプトである「コンパクト」に沿ってその過去と未来が独特な形で融合され、過去の遺産を守りながら、未来に向かって「未来をつかむ（Discover Tomorrow）」ことができる都市であることを世界に示している。会場は1964年東京大会のレガシーが残るヘリテッジゾーンと、未来の都市開発モデルである東京ベイゾーンという2つのテーマ及び運営ゾーンに位置する。東京圏にある33の競技会場のうち28会場は選手村から半径8km圏内にあり、選手のことを最優先に考えた、極めてコンパクトな配置となっている。

計画されている37の競技会場のうち15会場（41％）は既存のものであり、その中の2会場は2020年大会のために恒久的な改修が必要となる。既存会場のうち3会場は1964年大会の時に整備されたものであり、当時水泳とバスケットボールの会場だった**国立代々木競技場は2020年ではハンドボールの会場**に、体操や水球が行われた東京体育館は卓球の会場、日本武道館は1964年と同様2020年も柔道の会場として利用される。

2020年大会に向けて建設が予定されている競技会場は、総競技会場数のうち22会場（59％）であり、そのうちの11会場は東京のレガシーとして残す計画である。こうした恒久施設のうち、1964年のオリンピックスタジアムであった国立霞ヶ丘競技場は、テストイベントが行われる2019年までの完成を予定しており、2020年大会では開・閉会式、陸上競技、サッカー及びラグビーの会場となる。武蔵野の森総合スポーツ施設は、



東京西部の多摩地域に2016年の完成を目指しており、2020年大会では近代五種が行われる予定である。

会場の選定、建設状況及び立地は、東京の中長期計画「2020年の東京」を中心に、社会、開発、持続可能性に関わる東京都の計画に合わせるとともに、2020年東京大会を選手重視のコンパクトな大会にすることを目指す。

1964年大会のレガシーとして使用される競技会場の中心となるのは、新しいオリンピックスタジアムであり、世界でも最新鋭の競技会場として生まれ変わる。そこでは、歴史と伝統が、東京の革新性や先端技術と融合し、国内的にも国際的にも新たなスポーツの象徴となる。2020年東京大会の開・閉会式がこの会場で開催されるほか、今後数十年にわたり注目を集めるスポーツイベントが開催される予定である。このほかにも、改修された1964年大会の会場を使用する例として、**ハンドボールの会場となる国立代々木競技場**などがあげられる。

（注）ハンドボール競技会場は、1964年9月竣工、2007年8月改修、総席数12000席、練習会場は4箇所としている。



ハンドボールの競技日程

オリンピック開会式翌日の2020年7月25日（土）から女子の予選リーグが開始、以降は男女交互の日程で連続10日間に亘り予選リーグを戦う。8月4日

（火）には女子・準々決勝、8月5日（水）男子・準々決勝、8月6日（木）女子・準決勝、8月7日（金）男子・準決勝、8月8日（土）女子・3位決定・決勝、8月9日（日）のオリンピック閉会式となるこの日に、男子・3位決定・決勝で全16日間の大会は終了する。尚、前年2019年7・8月にはテスト・イベントが予定されている。

終わりに

人々を魅了し、興奮と感動をもたらす素晴らしい大会東京は、世界で最も先進的で安全な都市の中心で革新性とインスピレーションを結び付けるという大会ビジョンの実現に向けて全力で取組み、万全の準備を整えている。私たちは、オリンピック・パラリンピック競技大会が持つ力を、日本人の独自の価値と世界的な潮流を生み出す都市の活力に結びつける。

また、将来を担う新しい世代のために、オリンピック・パラリンピックに更なる価値をもたらし強化するダイナミックな祝祭を開催し、世界中のより多くの若者がスポーツの夢と希望を分かち合えるよう貢献していく。

東京は、何世紀にもわたって世界最大かつ最もダイナミックな都市の一つであった。国際舞台への再登場は、1964年にオリンピック大会を開催する栄誉を得たことで確実なものとなった。私たちの夢は、3500万人の人口を擁するメガ・シティに成長し、ビジネスと金融、文化、エンターテイメント、そして通信やメディアの国際的な中心地となった東京で、2020年にスポーツとオリンピズムが再び中心になることである。

この夢は、1964年大会のレガシーによって、スポーツの素晴らしさに気づいたことから始まっている。日本オリンピック委員会（JOC）は招致活動の先頭に立ち、1世紀にわたってオリンピック選手を支援してきた経験や知識を継承している。

招致計画は東京都の長期都市戦略と完全に一致し、この戦略を一層加速し、支えるものになるようJOCは東京都と密接に連携している。都民や国民は、再生する東京湾岸部を中心に整備される新たな緑の空間やスポーツ施設、教育施設などの恩恵を受けることになる。

この立候補ファイルに盛り込まれた計画は、前回の招致活動にあたって国際オリンピック委員会（IOC）からいただいた意見も反映されている。我々が採用した方向性は、2016年大会の招致計画の良い部分をそのまま継承し、更なる改善を行うという明快なものである。

新たなランドマークとなるオリンピックスタジアムや選手村計画の改善などは、そうした取組の成果である。JOCとの継続的なパートナーシップのもと、招致委員会とあらゆる関係者はこれらの実現に向けて全力を尽くしていく。

2020年東京大会は、数十年にわたり主要なスポーツ大会を開催する中で、我が国が培ってきた経験や、世界で最も効率的で安定した都市が誇る発達した都市インフラの恩恵を受ける。大会に必要な保証はすべて署名済みである。

また、現在の不安定な世界経済情勢の中にあって、日本の経済は安定しており、大会の予算は保証されている。更に東京都は、2020年東京大会の資金調達を目的として45億米ドルの「開催準備基金」を設けている。

2020年東京大会は、東京が世界に誇る都市インフラや、革新性、先端技術を背景に、世界的に知られた若者文化のエネルギーを原動力として、堅実かつ卓越と興奮の大会となる。そして、世界で最も刺激的かつ安定した都市の中心に—東京、日本、世界中の何千万人もの人々の心にも同様に—オリンピズムとスポーツの力を伝えていく。

2020年東京大会は最高の大会となり、東京、日本、そして国際スポーツに長期的なレガシーをもたらすだろう。

以上、立候補ファイルからの抜粋終わり



2020年オリンピック・パラリンピックを日本で！
2013年9月7日、開催都市決定!!



今後の日程

- 2013年1月7日
  IOC国際オリンピック委員会への立候補ファイル（詳細な大会開催計画文書）提出
- 2013年3月4日－7日
  IOC評価委員会による各立候補都市視察
- 2013年7月
  IOC委員へ開催計画に関するプレゼンテーション（ローザンヌ）
- 2013年9月7日
  第125回IOC総会（ブエノスアイレス、アルゼンチン）2020年オリンピック・パラリンピック競技大会開催都市決定

国民・都民の支持率を上げていこう

IOCが昨年5月に公表した調査結果によると、マドリード78%、イスタンブール73%に対し、東京は47%と大きく水をあけられていたが、ロンドン大会後、JOCなどが東京・銀座でメダリストの凱旋（がいせん）パレードを行うと、沿道に約50万人が集まる盛り上がりを見せ、10月の招致委の調査では都民65%、国民64%にまで支持率が上昇した。昨年10月にはマドリードが80%を超えたと公表するなど他都市も勢いを増す中、IOCによる再度の支持率調査は2013年1月から実施されると言われている。支持率をさらに上げて、最終的には70%くらいが必要とされている。

日本のハンドボールは、オリンピックへの出場が待望されている。男子は1988年のソウル大会、女子は1976年モントリオール大会を最後に出場できていない。

ロンドン大会後に強化体制が変わり、リオ目指して再スタートが切られたところであり、悲願達成に向けハンドボール関連者が一丸となり取り組んでいる。

リオの次の大会を是が非でも東京に招致し、スポーツの良さ、ハンドボールの醍醐味を肌で感じることができるよう、日頃より関心を持ってサポートしていこう。

～もう一歩の学生勢だが…～

企画・広報委員
早川　文司

フリースロー
Free Throw

全日本総合選手権で男子は湧永製薬の8年ぶり14度目、女子はオムロンの2年連続15度目の優勝で幕を閉じた。映像も例年のＮＨＫテレビでの男子決勝だけでなく、湧永製薬が日本リーグなどでもやっているインターネット中継でも準々決勝からライブ中継をしたお陰で聴視されたファンも多かったはずだ。こうした試みは今後もっと増えるだろうから楽しみは多い。

ところで、今大会で喜ばしかったことの一つに、学生勢の奮闘がある。男子は参加4校が1回戦をそろって突破。女子も4校中3校が初戦をものした。

男子がすべて初戦をクリアしたのは2007年以来のことである。この年は日体大が3位、早大もベスト8に進出と気を吐いている。

女子を含め今回は準々決勝ですべて姿を消したのは残念だったが、学生勢の上位進出は日本球界のレベルアップには欠かせないし、日本リーグ勢をはじめ社会人チームにとってもいい刺激になることは間違いあるまい。

しかし一方、学生勢の躍進は裏を返せば、寂しい現実を突きつけているとも言えるのではないだろうか。いくら全日本学生選手権の上位4校といえ、日本リーグ加盟のチームが早々と敗退しては、トップリーグの名前が泣く。日本リーグのレベルが問われる一面も合わせ持つ。日本球界の頂点に立つリーグだけに、あまりにも寂しいと言わざるを得ない。「だから一発勝負は面白い」では済まされない課題でもあろう。“番狂わせ”と喜ぶのは観客だけでいい。

全日本総合選手権は日本ハンドボール界の最高の権威ある大会だと認識している。日本リーグ勢に加え学生やジャパンオープンの上位が参加して名実ともに日本一を争う大会。いくら“怖いものなし”と立ち向かってくる学生勢といえども、かわす術を見せるのが日本リーグ勢の戦いだろう。

サッカーには元旦の決勝が恒例になっている天皇杯全日本選手権がある。ここでも時折、番狂わせはあるがJ2でも下位の取りこぼしはまずない。プロとアマの違いがあるとはいえ、それほどプライドと実力を兼ね備え持って戦っている。ハンドボール界が五輪出場を本気で熱望するなら、もっともっと日本リーグ勢のレベルアップと同時に、トップリーグとしてのプライドがあってしかるべきではないだろうか。

学生勢が弱いとは決して言うつもりはない。もっと旋風を起こす活躍をしてもらいたい。でも、今回の戦いを振り返って全体の底上げを図っていくことを改めて痛感した。こうした現象が続く限り日本の「五輪」はいつまでも“悲願”のままで月日が流れていくような気がしてならない。

審判部報告

第64回全日本総合ハンドボール選手権大会に参加して

東京都ハンドボール協会　高橋 恭文・塚本　光

去る、2012年12月19日（水）～23日（日）、大阪市中央体育館において全日本総合ハンドボール選手権大会が行われました。今回、レフェリーとして初めて参加させて頂き、その感想を記したいと思います。

声掛けは、ちょうど11月中旬の全日本学生選手権大会にレフェリーとして参加時でした。私達は日本リーグ担当レフェリーではないので、日本最高峰の大会である全日本総合選手権大会への参加打診を頂くことは青天の霹靂であり、大変恐縮しましたが、職場の皆様のご理解やご支援を支えに、これを良い機会と捉え参加の返事をしました。

しかし、ただ、参加するのでは、真剣勝負をするチーム・選手、また、この大会を楽しみにしている多くのハンドボールファンに申し訳なく、参加までに私たちは「心技体向上」を課題に掲げ、全日本総合選手権大会に臨むことに致しました。まず、「技術」の部分は、出来るだけペアで多くの試合を吹笛し研修すること、また、直近1年以内に担当した試合の視聴覚資料をもって位置取りや、客観的にみることで自分たちの判定や立ち振る舞いを省みることを実施しました。次に、「体力」においては、トレーニングを平日に確保するため、朝の時間帯の使い方を工夫しランニングなどの体力トレーニングを行いました。ところが、「心」においては、なかなか良い方法がなく困っていたところ、11月下旬に、呉市で日本リーグ女子強化キャンプにて行われた、J.H.A レフェリーアカデミーに参加し、藤井俊朗審判長、越田義昭審判審査委員長、仲田稔J.H.A レフェリーアカデミー校長をはじめ、皆様のご指導を頂き、表現（判定）することの躊躇が大きく減りました。また、全日本総合に選手として参加したことはないですが、日頃からハンドボールのことを第一に考え、ストイックに生活していた選手時代を思い出し、一般企業で働きながらもハンドボール中心に、ストイックに生活し、選手と心のテンションをあわせることを事前に行い、選手と同じ気持ちで大会に臨むよう心掛けました。

さて、大会当日。審判会議から始まります。藤井審判長から、特に大会に臨む姿勢についてご指導がありはじまりました。ともに参加されるレフェリーには、全日本総合16回目の大嶽氏をはじめ、多くの経験あるレフェリーの方々がおり、その方たちの存在と、大会までの事前準備が緊張感を力に変える原動力となりました。また、代表者会議は、他の全国大会よりも緊張感があり、日本最高峰の大会に相応しい内容でした。

実際に試合を担当して、諸先輩方のアドバイスや自分たちの事前準備がじわじわと効力を発揮し、今ある限りのパフォーマンスを発揮することができました。ただし、リーグ・一般・学生のカテゴリーを担当しましたが、それぞれのカテゴリーのチームでチームの目標、ハンドボール観がそれぞれであり、それを評価し、ハンドボールを思いきりプレーする環境であったかどうかというのは、課題が残りました。これからも日々研究や経験を重ね、多くの選手・チーム・観客がハンドボールを楽しめるよう、レフェリーとして精進して参りたいと思います。

また、ハンドボールに対して常に誠実に、事前準備を怠ることなく、判定に対しては毅然さと謙虚さを併せもち、日本のハンドボールの強化の一助となればと願います。

本大会では、大会関係各位、諸先輩方、また、ハンドボール関係者以外の職場・家族にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。



IHF-GRTP 福岡開催について

Global Young Referee Training Program

2012年11月12日～16日



はじめに、これまで日本で開催された国際審判員育成コースについて第1回目は1991年2月に埼玉県で行われ、講師として当時のIHF副審判長として、ノルウェーからボルシュタット氏、アジアの審判長で韓国のパク氏と4カ国の受講生（日本・韓国・中国・台湾）で実施されました。当時は実技テスト・ペーパーテストに合格すればその時点でIHFの資格を取得できるシステムでした。その後、審判員のさらなるレベル向上のためにAHFコンチネンタルレフェリー（アジア大陸）の資格を取得し、次にIHFレフェリーの資格へと制度変更されてから1998年7月に広島においてIHFよりリトアニアのヘルベルト氏、と韓国のパク氏の2名の講師と4カ国（日本・韓国・イラン・台湾）の受講生で実施されました。そして、2011年2月に福井でのアジアコンチネンタルレフェリーコースではイランのタワコリ氏とクウェートのカラフ氏の2名の講師と4カ国（日本・中国・韓国・タイ）の受講生。そして4回目となる今回は新システムであるIHF-GRTPの制度としては初のホスト国となり最大規模（8カ国の受講生）コースになりました。

今回はIHFの審判長であるドイツのマンフレット・プラウゼ氏、審判委員会でスイスのローランド・ブルギ氏、アジア大陸審判長でイランのダウド・タワコリ氏の3名の講師と8カ国の受講生（女性ペア日本・イランの2カ国）で実施されました。プラウゼ氏はインカレにおいての日本人レフェリーについてもご指導いただき、とくに若手レフェリーの高橋（東京）・伊東（神奈川）ペアに対しては、「大変よいレフェリーで、将来が楽しみである」と熱心にアドバイスを与えていました。

参加レフェリーは以下の通り

BRN	**UAE**
Sameer MARHOON	Shehab Ahmad JUMA
Husain ALMAWT	Mohamed Naser ZOHARI
CHN	**KOR**
Zhaomeng LI	Bo-Geun KANG
Jianpeng LIU	Young-Hoon KIM
IRI	**KAZ**
Leila SHAFAEI	Makhsadbek NARMETOV
Mahmonir SADEGHI AMINI	Artyom MELNICHENKO
IRQ	**JPN**
Khalid HUSSEIN	Tomoko OTA
Fadhil IMRAN	Mariko SHIMAJIRI

当然のことながら、今回の参加レフェリーはアジア選手権など数々の国際試合をすでに経験しており前回の福井のコースよりはかなりの技術の向上がみられ、プラウゼ氏やタワコリ氏からは「アラブ地区のレフェリーは確実にレベルアップしており日本のコンチネンタルレフェリーは完全に抜かれているどころか、水をあけられている」とのこと。また、全日本学生選手権をモデルゲームにした実技テストにおいての感想は、大変スピーディーでクリーンではあるがステップが早

くて細かく判定が難しくステップについては東アジアとヨーロッパでは温度差があるらしい。また、試合前のメンバー確認について、「テクニカルの仕事なのになぜレフェリーに確認させてるのか？」と言った程度でありました。

日本で開催することによって、日本に対するアジア連盟及び国際連盟と連携を深める事ができると共に、世界最新の情報をIHFより直接得ることもでき、また学生も今のうちから外国人レフェリーに吹いてもらっておけば、代表選手になった時に必ず吹かれる日が来るため選手にとってもかなりの効果はあるはずです。今回の講習会で使用した資料やその他の資料まで数多くいただくことができ、日本ハンドボール協会のために活用する予定です。現在、視聴覚担当の冨田氏が編集作業にあたっておりますので、審判部合同委員会を通じてなるべく早く都道府県協会まで伝わるよう努力しております。

講習会の閉会式において、プラウゼ氏よりサプライズの発表があり、日本の女性ペアである太田・島尻については、本来の規則であれば２回のIHF-GRTPを受講しけなければならない義務があるが、女性レフェリーを早く登用したいことと、現在アジアでのIHFレフェリーは中国の１ペアしかおらず、引退も近いということで太田・島尻ペアにとっての好条件も重なり３名の講師で相談した結果、今回は特別にIHFの資格を与えようとの事でした。日本ハンドボール協会初の女性IHFレフェリー誕生は大変喜ばしいことであり、彼女達に対しては藤井審判長より、よくやってくれたと賞賛と感謝の言葉を贈られました。ゴールラインではなく新たに、ハードで険しく厳しい困難な道のりのスタートラインに立っていると言う自覚を持ち、日本協会の財産としても今後の更なる鍛錬・研修を忘れないでいただきたいと思います。そして今後の日本ハンドボールの、またアジアハンドボールの女性レフェリーのパイオニアとなってオリンピックの舞台に立つ事を目標に精進、努力する事を期待しております。もちろん審判部サイドは第２、第３の女性国際審判員を養成することも課題の一つになったと感じます。



ここまで来られたのも、レフェリーアカデミーを発足し熱心に指導していただいた前日本ハンドボール協会審判長の植村先生の努力の賜と感謝しております。前回の福井でのレフェリーコースでは企画・運営を植村前審判長が中心となって行い、それをベースに藤井現審判長が引き継ぎ、今回のコースの企画・管理・運営においても藤井審判長の指示によりスムーズに行え、成功を収めることができたと思います。ルールだけでなく世界の情報や技術についても直接得られる事は日本協会にとっても財産になることでしょう。そして国際連盟との連携を深めるためには、レフェリー以外の国際行事に関して今後とも機会があったらぜひ日本で開催できればと感じております。その時はより多くの方が参加できるような企画も検討課題の一つとなります。これからの審判部も藤井審判長を中心に新たな企画、研修を実施し更なるレベルアップを図れることと思います。

最後にこの場をお借りして、今回のコースに対して協力いただきました学連審判長の高野先生をはじめ日本学生連盟及び九州学生連盟の皆様。そしてシャトルランテストのために早朝より体育館で準備していただいた福岡国際大学の木下先生には大変感謝申し上げます。またGRTP開催まえの11月８日よりIHF審判委員会の会議の補助からGRTP終了までお手伝いいただいた後藤氏、そして毎晩遅くまでタワコリ氏と共に講習会の資料を作成してくれた茨城県の冨田先生には、更に深く感謝いたします。

ハンガリーでのハンドボール



ハンガリー１部リーグ　Cegled
銘苅　淳

私が海外移籍を決断した理由は様々あるのですが、一つ言えることは、自分は海外でプレイしたい。むしろ、するものだと思ってハンドボールをしていたからだと思います。

中学２年生でハンドボールを始めたその日に、当時180センチを超えていた私に対して、「世界では小さいんだから、まずはステップシュートを打て」と言った、東江（正作：当時港川中学コーチ）さんの一言から自然とそういう思考の元でハンドボールをするようになったのだと思います。

．元々、将来的にハンドボールを教えたいと考えていたので、一度は海外に行き、日本以外でハンドボールすることを学びたいと思っていました。

中学、高校、大学、社会人と指導者の方々にも恵まれ、いろんな考え方を学びましたし、ハンドボールすることとはどういうことかも教えてくださいました。

出会い、支えてくださった多くの方々のおかげで、いまハンガリーでハンドボールをすることができているのだと感じていますし、ここまで導いて下さった方々に感謝せずにはいられません。

稚拙ではありますが、ハンガリーでのハンドボールにおける環境や、日本との違いをお伝えいたします。

ハンガリーでの生活

ハンガリーでの生活に関してですが、私自身はプロという立場で、ハンドボール以外の仕事をしていません。チームによると思いますが、ハンドボール以外にも職業を持っていて、毎日の練習に参加できない人もいます。全員がプロとして生活できるほどのサラリーをもらえるのはトップチームだけだと思います。

また、ハンドボールはサッカーに比べるとどうしても経営が安定していません。ハンガリーという国自体も裕福ではありませんが、サラリーが遅れてもらえるというのも珍しい話ではありません。私が最初に所属したKecskemetというチームは来週にはもらえるから、来週だからと先延ばしになり、その間にスポンサーの撤退が決まり、結局、所属した三ヶ月でサラリーをもらうことはありませんでした。しかしながら、チームスタッフは選手の移籍先を探してくれ、私は運良く現在のCegledというチームでハンドボールできています。

サラリーが出なかった期間、幸いにもハンガリーは物価が安いので、家賃も含めて10万円かかりませんでした。貯金を崩すという形にはなりますが、大学生の奨学金よりも安い金額で日々の生活を送ることができます。これから海外に挑戦したいと考えている選手は、その国の物価や生活水準も考慮した方がいいかと思います。

ハンガリーでのハンドボール

私が所属しているクラブでは、練習は試合前以外は基本、午前と午後の二部練習です。時間は１時間半で体育館が割り当てられているので、その時間内にきっちり終わります。流れとしてはその日のテーマがはっきりしているので、走る時は走るし、シュートの日は徹底してシュート練習をします。しかし、トレーニングにはストーリー性があり、ぶつ切りになることはありません。また、少ない時間で効率よく運動量を確保するために、キーパー練習などもDFのコンタクトをいれたり、OFフットワークをいれたり、走りながら行ったりします。トレーニングも毎日変化があり、言葉のわからない私は毎日見て覚えることから始まるのですが、日々同じトレーニングを同じように、惰性で行うことよりも、なぜ、この動きをするのか、いつこの動きが必要なのかを考えるよい機会になっています。

ハンガリーでの試合ですが、リーグ自体はIHFのランキングでドイツ、スペインに次ぐリーグとなっています。12チーム、２回戦総当たりの22試合ですが、その後、上位・下位で６チームずつに分かれ、ホーム＆アウェーで試合をします（最低でも32試合）。

190センチくらいの選手はゴロゴロしてて、今では大きいと感じるのは２ｍを超える選手になりました。DFはホールディングにくる選手はものすごい勢いで突進してきます。待ってシミュレーションでチャージをもらうということはほとんど見受けられません。OFはそこまでシステマチックなことはしませんが、一人一人の強さがあります。ポストが勝てると思えば、徹底してポストを使ってきますし、２ｍを超える選手は遠くから思い切り打ち込んできます。DFもOFも日本ほど整理されていないと思います。しかし、ハンドボールの目的は失点を防ぐこと、ゴールすることなので、方法論よりも結果を求めるために、その瞬間にものすごい集中力を

発揮している印象です。

ハンガリーの育成

ハンガリーの人口は1000万人にも満たないです。しかし、スポーツは盛んで、オリンピックでも素晴らしい成績を収めています。ハンガリーではトップチームを筆頭に各カテゴリーのジュニアチームを持っています。20歳、18歳、16歳、リトル、キッズといくつにもカテゴリーが分けられて、それぞれに指導者がついて教えています。トレーニングも多くの器具を用いて様々な状況を作ることで動きづくりを行っています。松やにやボールの質にもよりますが、ボールも扱いやすく、子供達を見る限りボールを掴むということにストレスを感じずに振り回しているという印象です。

我々トップチームの試合前に16歳以下、20歳以下の試合を行います。ジュニアのタレント選手はトップチームの試合にもベンチ入りするので、ダブルヘッダーで試合をすることになります。

また、22歳以下の選手はトップリーグと2部リーグと両方に登録することが可能で、トップリーグでなかなか試合に出られない選手も2部のチームで試合経験を積むことができます。年齢の違うチームでプレイすることは、立場が違ってくるためそれぞれで感じるもの、学ぶものも多いと思います。日本の場合、そのカテゴリーよりも上のカテゴリーとトレーニング、試合する機会は少ないので、それを日常に体験できること、試合数が多いことは大きな違いだと思いました。

日本人の可能性

私がハンガリーでハンドボールしていて感じることは、日本人の可能性はおおいにある、かもしれないということです。トヨタ車体の酒巻テクニカルディレクターは常々、日本人の可能性について情報を発信してくださいましたが、それを実感しています。どんなトレーニングでも真面目に取り組む、こちらの選手にはない速さがある、繊細なプレイができるなど、ストロングポイントは沢山あります。

私自身は、突出して運動能力が高いわけでも、技術、戦術に長けているわけでもありません。日本には私よりも秀でた選手はたくさんいるはずです。

しかし、海外でハンドボールするということは、生活の基盤を海外に移すことでもあります。そして日本以外のハンドボールに慣れて、馴染むことでもあります。そこにはもちろん、言葉の違い、生活習慣の違い、ハンドボールの違いがあり、そこに適応しなければ持っている力を十分に発揮することは難しいと思います。

そのためには、やはり、自立・自律した選手になることだと思います。慣れない環境で何を食べるのか、どうコンディションを維持、向上させるのかはものすごく大事なことで、それがしっかりしていないとパフォーマンスは期待できません。チーム作りを管理を中心に行っている場合、トレーニングはやれと言われたからやる、食べろと言われたから食べる、そうじゃないと言われたからやらない、となって、結局その管理下から解放された場合、自分で考えて取り組めなくなってしまいます。その点、私の場合、指導者、支えてくださった方々が知識、知恵として授けてくれたので、ハンガリーでもハンドボールに対してストレスなく取り組めていると思います。

もちろん、怪我なく、自分よりも大きな選手を相手にする場合、身体は一番の資本です。現在はサイドプレーヤーがポストを守ることも珍しくないので、目安としては最低でも「身長－100～90」の体重は欲しいところです。身長が180センチだとしたら80～90キロということになります。

まとめ

ここまで長々と書いてきましたが、私が望むことは日本のハンドボールが発展することです。そのためにももっと多くの選手が日本以外の国に活躍の場を求めて出て行くことだと思います。そのために情報の発信をしていきたいですし、選択肢の一つとして考えておくことも大事だと思います。もしも、未来において海外でハンドボールしたいと考えているなら、今すぐに何でもいいから取り組みを始めることだと思います。日々のトレーニング、語学の勉強、身体作り、情報収集、インターネットでのハンドボール観戦などです。そして、出会いを大切にして、夢を口に出すことだと思います。周りに話をするうちに、自分はそうなるものという思考になりますし、決意が覚悟になり、サポートしてくださる方が現れます。私も、多くの方にお世話になりながら、ご迷惑をおかけしながら、最終的にハンガリー出身のローランドさんにお願いして、ローランドさんの友人がコーチをしているチームに入ることができました。私自身、日本国内でも目立った成績を残しているわけではないですが、いまこうやって夢を叶え続けていける場所にいること、そこに導いてくださった多くの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

まだまだ力不足は否めませんが、これからも私らしくハンドボールに取り組み、何かしら有益な情報を発信していければと考えています。

そして、ドイツにいる植松さん、内林さん、田中さん他、多くの選手、デンマークにいる門山さん、出村選手など、海外でハンドボールしているすべての日本人が闘う一日には意味があると信じてこれからも精進していきたいと思います。



あなたはハンドボールが好きですか？

～"うっかり"ドーピングを防ぐために～

日本ハンドボール協会 医事委員会、アンチドーピング特別委員会

平成24年度に入り、2件の"うっかり"ドーピングにより、それぞれ3ヶ月の資格停止処分となりました。"たかが3ヶ月"と思われる方もいるかもしれません。ですが、本当にそれだけでよいのでしょうか？

今回、当特別委員会として、"アンチドーピングに関する意識調査"を行いましたが、まだ集計途中ですが、今後も"うっかり"ドーピングを起こしかねない結果が既に出てきております。途中経過を示しつつ、大会直前にむけ、ここだけはとにかく守ってほしいことを報告しますので、参考にして下さい。

（途中経過ですので、最終発表とデータが変動することをお許しください）

1．サプリメントの使用には細心の注意を払う

"サプリメントを使用する"と答えた方は約3割でした。購入経路は8割が店頭販売でしたが、少数ですが"海外のものを購入"の方がいました。

サプリメントは医薬品ではなく、その成分を全て表示する義務がありません。よって、**表示されていない禁止薬物が含まれている場合が多くあるのが事実です。**もし使用を希望する際は、"禁止薬物が含まれていない"と日本アンチドーピング機構（以下JADA）により認定を受けた**"JADA認定商品マーク"の表示のあるものを使用して下さい。**

2．栄養ドリンクにも禁止薬物の可能性があります

"栄養ドリンクを飲む"と答えた方は約4割でした。"禁止薬物を調べますか"に対しては2割が調べるとのことでした。8割の方が"禁止薬物が入っているとは思っていない"と回答がありました。

栄養ドリンクは"体を元気にする"という目的があり、よって、興奮剤、漢方薬等を含んでいる場合が多くあります。また、**レッドブル等もその使用には自己責任でお願いします**と言われており、我々の見解としては、使用は勧められません。

3．漢方薬の使用について

"漢方薬を使用する"と答えた方は、約1割でした。ですが、栄養ドリンク等で、知らず知らずのうちに服用している可能性があります。**漢方薬の中には、興奮剤の成分（麻黄、半夏など）、ホルモン剤類似成分（鹿角など）を含むものが多数あるので、使用を控えて下さい。**

4．薬剤を購入する経路について

"病院を受診し、医師の処方を受ける"と答えた方が、9割以上と大多数を占め、"安心できる""効果が高い""安価である""ドーピングのことをちゃんと知っている"と言う答えが大多数でした。しかし、このなかで**"ドーピングのことをよく知っている"というのは残念ながら間違いと言わざるをえません。**"一部の医師はドーピングのことをよく知っている"と言えます。**実際に今年度の違反例の一例は、"医師の処方にも関わらず、禁止薬物であり、それにより処罰の対象となった"ものです。**

さらに、医師の診察時に、"自分がドーピング検査を受ける可能性があると伝える"の問いに対しては、大学生では約9割が"いいえ"と答えています。必ず、医師の受診の際に**"禁止薬物を調べて処方してほしい"と、言いにくいかもしれませんが伝えるようにして下さい。**

また、医療行為として、どうしても使用が必要な場合もあります。そうした際には、**治療目的使用に係る除外措置（以下TUE）**を申請することにより、禁止物質、禁止方法を治療目的で使用できる手続きです。医師の中にはTUEの存在を知らないものもいますので、ご自身から申し出るようにして下さい。

市販薬についての説明です。**市販薬の風邪薬等には"ほとんどに禁止薬物が含まれている"**という認識を持って下さい。"風邪薬＝からだの力を向上させる（滋養強壮）"という概念があります。よって、風邪薬の中には興奮剤が入っている可能性が非常に高いです。チームの常備薬を使用するならば、**チームトレーナーと一緒にもう一度禁止薬物が入っていないかJADAのホームページで検索、薬局で購入するならば、必ず薬剤師に確認（薬局の店員が全て薬剤師という訳ではありません）する**ようにして下さい。

その上で、使用前にもう一度、JADAのホームページで確認して下さい。または、日本ハンドボール協会まで問い合わせて下さい。

こうした点をわすれて、それに気がついた際、必ずチーム責任者に相談して下さい。"禁止薬物を誤って摂取し、これを申告すれば処罰は免れる"という設問に対し、約6割の方が"免れる"と答えていましたが、結論から言えば**"免れることはできません"。試合出場し、検査対象となり、検出されれば、たとえ申告していても処罰の対象となります。**ですので、登録メンバーから外す必要があります。このような際は、必ず、日本ハンドボール協会まで問い合わせて下さい。

ここまで、大会直前での"うっかり"ドーピングへの防止策を述べて参りました。すべてのドーピング対策には不十分ですが、大会直前期は最低でも以上のことをお守りください。**たかが"うっかり"ドーピングと思われているかもしれません。ですが、あなたのハンドボール人生を全て失う"うっかり"ドーピングといえます。**日本リーグの選手（特に日本代表）の中には、**"市販薬、漢方薬、サプリメント、栄養ドリンクには全て禁止物質が入っていると考え、現役中は一切飲まないと決めている""医師に確認して処方してもらい、さらに自分で確認する"**と徹底している我々の求める理想の選手もいました。

もう一度、最後にお聞きします。

あなたはハンドボールが好きですか？

皆さんが精一杯取り組まれたハンドボールを失わないために、自分で自分を守って下さい。

平成 24 年度　第 2 回理事会

日　時：平成 24 年 11 月 10 日（土）
13：30 ～ 16：00
場　所：味の素ナショナルトレーニング
センター研修室 1・2
出席者（敬称略、名簿順）：
理事：渡邊佳英、市原則之、多田　博、
川上憲太、大橋則一、角　紘昭、津川　昭、
西窪勝広、志々場修二、蒲生晴明、藤森　徹、
藤井俊朗、田中　茂、松井幸嗣、稲生　茂、
山川博行　　以上 16 名
監事：伊藤宏幸、近森克彦　　以上 2 名
参事：川原繁樹、小西博喜、小島収治、
高山重雄、杉本眞一、中村博幸、佐藤公美、
佐藤喜一　　以上 8 名
（事務局）兼子、床尾

以上、出席理事 16 名、委任状出席 3 名、出席監事 2 名、出席参事 8 名、事務局 2 名

会議に先立ち、8 月 18 日に逝去された森安昭雄理事のご冥福を祈り黙祷をした。

〈理事会成立の確認〉

本理事会が理事定数 20 名、出席 16 名、書面委任 3 名であり、財団法人日本ハンドボール協会寄附行為第 26 条に定められた 3 分 2 以上の出席のため、本理事会が成立していることが報告された。

次に議長の選出が行われ、寄附行為第 25 条、第 3 項に基づき、渡邊会長が議長となった。

渡邊会長より以下の通り挨拶があった。

先週、ドイツのヘルツォーゲンナウラッハにて開催された IHF 理事会に出席した。昨年の男子世界選手権はブラジル協会主催であったが、開催地州知事の交代により、開催都市が急遽変更され、大会運営も IHF が主導した。ブラジル協会は数億の負債を抱えるに至った。IHF は、来年より世界選手権への参加国の負担が変わる方向である。又、10 月にはドーハで IHF 総会が開催されるが、韓国協会も積極的にアプローチをしているようである。IHF の理事会メンバーが、2020 年開催のイスタンブールを視察しており、東京の脅威ともなりそうである。

日本協会は、来年 2 月 2 日には創立 75 周年を迎える記念の年であり、良い年となる事を期待している。

〈議事録署名人の選出〉

続いて、渡邊議長より議事録署名人の指名が行われ、議長、川上憲太専務理事、藤森徹常務理事、松井幸嗣理事が指名され、満場一致で承認された。

議事進行は、審議事項より行うこととした。

審議事項

1．2012 年日本スポーツ賞、ミズノメントール賞推薦者について

大橋総務担当常務理事より、表彰委員会での候補者選考が説明され、世界選手権で決勝トーナメントに進出し見事 8 位入賞した女子ユース日本代表チームが候補者としてあげられた。ミズノメントール賞候補者については、まだ要項が届いていないが、本年はオリンピックイヤーでもあり、オリンピック出場競技から多数推薦が出るので、今回は推薦無しとしたい。

審議の結果、全員一致で日本スポーツ賞は女子ユース代表にすることで承認された。

2．契約処理に関する規程承認について

大橋総務担当常務理事より、契約処理に関する規程が説明された。

審議の結果、異議なく、本件は可決承認された。

3．神奈川県推薦評議員変更について

大橋総務担当常務理事より、神奈川県推薦評議員が小見氏から塩谷氏に変更することについて説明された。

審議の結果、異議なく、本件は可決承認された。

4．平成 25 年度登録料値上げについて

大橋総務担当常務理事より、平成 25 年度登録料値上げについて説明がされた。協会に向けジュニア・ユースなどの底辺強化もあり、更には協会財政の健全化に向け、来年度登録料を上げることにしたい。これに対して、意見として、代表選手の自己負担の状況はどうか、業務執行における節約はされているか、小学生から新たに登録料を徴収することは抵抗があるのでは、等があった。これに対し、代表選手の自己負担は総額 3 千万円弱（欧州遠征では一人 20 万円、アジア 10 万円としている）であり、負担を減らしたいが予算的には厳しい状況には変わりない、又執行に当たっては各本部長に支出のチェックを厳しくお願いしている。小学生の登録に関しては、県協会が主催の大会が 3、4 回の実態もあり、又、ブロック大会も開催されておりこれには協会から補助もしている。受益者負担の考えからも、新規の登録料負担をお願いしたいとの回答があった。

審議の結果、異議なく、本件は可決承認された。

5．日本協会創立 75 周年記念事業について

大橋プロジェクト担当常務理事より、日本協会創立 75 周年記念事業の説明がされた。来年の 2 月 2 日に会費制で式典を開催すること、合わせて功績のあった方の表彰を行うこと、1000 万円の募金を行うことなどが説明された。

更に、村松参事より、75 周年記念誌発行に関して説明がされた。B5 版・624 ページの予

定であり販売予定価格は税込み1万円（送料は別）、掲載の内容、贈呈規準、発送の方法などが説明された。

審議の結果、異議なく、本件は可決承認された。

報告事項

1、第64回全日本総合日本協会推薦チームについて

大橋常務理事より、全日本総合日本協会推薦チームが説明された。男子は、日本リーグ9、インカレ2、ジャパンオープン2であり、協会推薦は、インカレ3位2チームと、ジャパンオープン3位HC岐阜とする。又、女子は、日本リーグ6、インカレ2、ジャパンオープン2であり、協会推薦はインカレ3位2チームとすることが補足説明された。

2．日本協会の事業活動中間報告について

川上専務理事より、日本協会の事業活動中間報告が説明された。

7月より強化本部長が交替、男女ナショナル新監督が就任したこと、インカレの中でIHF・GRTP（審判）が行われること、財務健全化が急務である事などが補足説明された。

3、強化方針・報告ついて

津川常務理事より、強化方針・報告について説明された。7月より就任してこの間新たな強化体制を検討してきた。リオに向け強化スタッフとともにニュージャパンを作り上げて行きたい。其の為には､個のスキルを上げて行きたい。ジュニアは代表として戦える選手を作り出すことであり、ジュニア・ユースともチームの強化ではなく、ジュニアアカデミー、ナショナルアカデミー、代表へと繋がる個の選手の引き上げを果たしたい。代表の強化には、日本リーグの強化は大事であり､大学のレベルアップも図り、総合力で臨みたい。来年の8月には、ユース大会が目白押しであり、各大会との日程調整などの格段の配慮をお願いしたい。

4．平成25年度事業計画・予算策定について

大橋常務理事より、平成25年度事業計画・予算策定について説明された。12月、1月の常務理事会を経て、2月16日開催の第三回理事会で確定していきたい。予算の執行状況は収支別月報の通りの進捗である。

5．公益財団法人移行進捗状況について

藤森常務理事より、公益財団法人移行進捗状況について説明された。内閣府の事務局から内定通知を戴いたので、来年4月1日新公益法人の設立登記をする。最初の評議員会は、平成25年6月8日を予定している。

6．平成24・25年度会議日程案及び平成24・25年度国内・国際大会日程について

大橋常務理事より、平成24・25年度会議日程案及び平成24・25年度国内・国際大会日程について説明された。

8．スポーツ振興くじ・基金他助成金について

大橋常務理事より、スポーツ振興くじ・基金他助成金について説明された。

9．国際関係について

蒲生常務理事より、国際関係について説明された。文科省の国際人養成プログラム研修者として、IHF本部に1名を派遣することにした。

10．全国理事長会報告について

川上専務理事より、全国理事長会報告について説明された。取分け、理事長の役割を再確認いただいた。

11．審判活動報告について

藤井常務理事より、審判活動報告について説明された。11月のインカレと併せ、IHF・GRTP（Global Referee Training Program）が開催されることが報告された。

12、普及指導部報告について

角常務理事から各担当参事より委員会報告すると報告された。山本参事により小学生関連、小山参事によりマスターズ関連、大原参事によりビーチ関連、小西参事より車椅子関連についてが説明された。

小学生関連では、指導者はただ、やれ、しろ、でなく判断力を養う、考えさせる指導を心掛けてほしい。これまでの経験で教えているが、J級指導員の普及などで指導者の心構えも普及・徹底させていきたい等の意見もあった。マスターズ関連では、Web登録の不慣れから紙ベースの登録も併用していることが報告された。ビーチ関連では、ビーチ専門の選手もいない状況の中、特に国際大会は2014、2016年を視野に取り組みたいとの報告があった。車椅子関連では、理念を持って活動してほしいなどの意見も出された。

13、日本リーグ報告

西窪常務理事により、来年第38回日本リーグより、HC高山（仮称）が女子リーグに新規加盟することが報告された。

14．マーケティング活動報告について

大橋常務理事により、マーケティング活動報告について説明された。

15．ドーピング防止活動について

川上専務理事により、ドーピング防止活動について説明された。取分け、再発防止策を作成し、HPで公開するとともに、インカレ、全日本総合などで徹底を図っていく。

16．がんばれハンドボール20万人会について

大橋常務理事により、がんばれハンドボール20万人会について説明された。登録がゼロの県もあり、何とか改善を図る努力をお願いしたいとの意見があった。

17．その他

杉本参事より、国体が無事終わったお礼と、HC高山の日本リーグ入りの報告があった。

市原副会長から最後に挨拶があった。来年度は、協会75周年も迎える年であり新しい気持ちでスタートして欲しい。又、日本スポーツ賞申請では、8位を推薦しているが他の競技団体と比べると如何か、最後に、オリンピック男女出場に向け、2020年東京にオリンピックを招致させたい、そのためには国民の支持率を高めていきたいとの挨拶があった。

スコアールーム

高松宮記念杯男子第55回・女子第48回全日本学生選手権大会

開催期日：2012年11月14日(水)～18日(日)
会　　場：福岡市・アクシオン福岡ほか

【男　子】

▼ 1回戦

日本体育大(関東) 38 (19－13, 19－21) 34 関 西 大(関西)
筑 波 大(関東) 34 (15－15, 19－10) 25 関西学院大(関西)
明 治 大(関東) 34 (21－10, 13－11) 21 沖縄国際大(九州)
大 同 大(東海) 25 (10－6, 15－16) 22 中 央 大(関東)
道 都 大(北海道) 29 (14－11, 15－14) 25 福岡国際大(九州)
名 城 大(東海) 28 (12－10, 16－13) 23 秋 田 大(東北)
大阪体育大(関西) 40 (22－9, 18－11) 20 東北福祉大(東北)
早稲田大(関東) 37 (17－12, 20－13) 25 立命館大(関西)
東 海 大(関東) 29 (7－10, 12－9) 26 高 松 大(中四国)
(2－2 延一 3－3)
(2－2 延二 3－0)
同志社大(関西) 42 (17－13, 25－12) 25 金 沢 大(北信越)
福 岡 大(九州) 37 (19－13, 18－21) 34 函 館 大(北海道)
日 本 大(関東) 32 (13－9, 19－15) 24 大阪経済大(関西)
中 部 大(東海) 39 (20－7, 19－9) 16 小樽商科大(北海道)
法 政 大(関東) 35 (18－11, 17－8) 19 天 理 大(関西)
中 京 大(東海) 46 (25－12, 21－13) 25 富 士 大(東北)

▼ 2回戦

日本体育大 25 (16－7, 9－9) 16 筑 波 大
明 治 大 24 (13－12, 11－10) 22 大 同 大
桃山学院大 32 (16－12, 16－11) 23 道 都 大
大阪体育大 27 (14－10, 13－13) 23 名 城 大
早稲田大 28 (13－4, 15－8) 12 東 海 大
同志社大 28 (18－13, 10－11) 24 福 岡 大
日 本 大 39 (15－12, 24－11) 23 中 部 大
中 京 大 26 (14－13, 12－9) 22 法 政 大

▼ 準々決勝

日本体育大 50 (25－11, 25－20) 31 明 治 大
大阪体育大 28 (14－8, 14－9) 17 桃山学院大
早稲田大 35 (17－11, 18－11) 22 同志社大
中 京 大 38 (18－15, 20－16) 31 日 本 大

▼ 準決勝

日本体育大 36 (20－15, 16－19) 34 大阪体育大
早稲田大 35 (20－11, 15－17) 28 中 京 大

▼ 決　勝

日本体育大 31 (11－10, 20－13) 23 早稲田大

【女　子】

▼ 1回戦

中 京 大(東海) 25 (11－4, 14－7) 11 東北福祉大(東北)
環太平洋大(中四国) 48 (25－4, 23－4) 8 北星学園大(北海道)
東 海 大(関東) 38 (16－7, 22－11) 18 愛 媛 大(中四国)
福岡教育大(九州) 29 (13－12, 16－11) 23 茨 城 大(関東)
富 士 大(東北) 25 (15－12, 10－8) 20 大 同 大(東海)
武庫川女子大(関西) 24 (15－9, 9－11) 20 桐蔭横浜大(関東)
日本女子体育大(関東) 25 (14－13, 11－11) 24 立命館大(関西)
富山国際大(北信越) 31 (15－14, 16－14) 28 環太平洋大短大(中四国)

▼ 2回戦

大阪体育大(関西) 26 (13－7, 13－10) 17 中 京 大
日本体育大(関東) 23 (14－8, 9－11) 19 環太平洋大
東 海 大 30 (15－7, 15－8) 15 関 西 大(関西)
福岡教育大 26 (13－9, 13－13) 22 早稲田大(関東)
大阪教育大(関西) 38 (21－7, 17－18) 25 富 士 大
筑 波 大(関東) 25 (14－13, 11－3) 16 武庫川女子大
福 岡 大(九州) 23 (11－11, 12－10) 21 日本女子体育大
東京女子体育大(関東) 36 (19－7, 17－8) 15 富山国際大

▼ 準々決勝

大阪体育大 33 (15－8, 18－11) 19 日本体育大
東 海 大 32 (18－11, 14－12) 23 福岡教育大
大阪教育大 31 (16－9, 15－13) 22 筑 波 大
東京女子体育大 34 (18－10, 16－13) 23 福 岡 大

▼ 準決勝

大阪体育大 31 (15－12, 16－8) 20 東 海 大
大阪教育大 33 (18－11, 15－13) 24 東京女子体育大

▼ 決　勝

大阪教育大 28 (15－13, 13－14) 27 大阪体育大

がんばれハンドボール20万人会「サポート会員」11・12月入会・継続会員

【栃　木】坂本定芳【埼　玉】岡村昭二、星野妙子【千　葉】山田友美【東　京】加藤祐策、寺嶋　潔、蒲生澄子、岡前義春、佐藤俊男、佐藤映子、嵩　聰久【神奈川】福井俊彦、田原やよい、生熊健二、加古川範子、白井香代子【長　野】後藤政俊【新　潟】飯田和弘【富　山】吉水慎一【福　井】稲富美由紀、佐々木輝明、土肥正彦、角谷喜代重、稲富智也【静　岡】坂東廣一【愛　知】筒井理絵、山本淳子、佐藤壮一郎、野田　清、坪井夕香【三　重】細野秀男【滋　賀】高畠典克【京　都】守本幸三郎
【大　阪】山中善之祐、赤星　明、西野　誠【兵　庫】狩野幸介、小玉規代【鳥　取】足立逸郎
【島　根】森江和吉【岡　山】奥埜啓子、奥埜美峰【広　島】白石　隆、田中友紀、山本伸二
【熊　本】藤田八郎【鹿児島】濱田直美

【2月・3月の行事予定】

【会　議】
2013年２月９日(土)　第２回評議員会
2013年２月10日(日)　第２回全国理事長会
2013年２月16日(土)　第３回理事会
2013年３月16日(土)　常務理事会

【大会等】
2013年２月９日(土)～11日(日)
全日本社会人チャレンジ2013（愛知県・一宮市）
2013年３月９日(土)・10日(日)
第37回日本リーグプレーオフ（東京都・駒沢体育館）
2013年３月23日(土)～27日(水)
第8回春の全国中学生選手権大会（富山県・氷見市）
2013年３月25日(月)～30日(土)
第36回全国高校選抜大会（静岡県・袋井市、浜松市）

お詫びと訂正

本誌昨年11月号（No.531）の17ページ、「全国高等専門学校選手権大会」の「戦評」記事の中で、下記のような誤記がありましたので、お詫びして訂正させていただきます。

準決勝、徳山高専対米子高専の試合の戦評で「米子キーパー山本の再三にわたる好守」という表記がございますが、「米子キーパー牧田の再三にわたる好守」の誤りでした。

HANDBALL　CONTENTS　Jan. Feb.

日本協会創立75周年からの
　さらなる前進……………………………川上憲太　1
第64回全日本総合選手権大会
　大会を終えて……………………………中村博幸　2
　　男子優勝　湧永製薬監督・玉村健次、選手・谷村遼太 … 3
　　女子優勝　オムロン監督・黄　慶泳、選手・藤井紫緒 …… 4
第14回女子アジア選手権
　報　告…………………………団長・津川昭　8
　報　告…………………………監督・栗山雅倫　9
　報　告……………………キャプテン・高橋　恵　10
　参加して……………………本田昭太、田渕元雄　12
男子55回・女子48回全日本学生選手権大会
　総　評……………………………………三輪一義　13
　男子優勝…………日本体育大学主将・平子卓人　14
　女子優勝…………大阪教育大学監督・土井秀和　15
　初出場のコメント……小樽商科大学・菱村祐樹　17
　初出場のコメント…桐蔭横浜大学・佐々木莉紗　18
清水新監督インタビュー……………………………20
東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会、
　IOCに立候補ファイル提出…………………………22
HC高山（女子）日本リーグ新規加盟決定　……………24
リオデジャネイロオリンピックに向けて
　（界友会から）…………………………………………25
フリースロー：もう一歩の学生勢だが…早川文司　26
審判部報告：
　第64回全日本総合選手権大会に参加して
　　……………………………高橋恭文・塚本光　27
審判部報告：IHF-GRTP　福岡開催について………28
ヨーロッパのハンドボールLIFE　………銘苅　淳　30
医事委員会だより………………………………………32
協会だより………………………………………………33
スコアールーム：全日本学生選手権大会……………35
20万人会員／２・３月の行事予定／もくじ…………36

（登録チームの購読料は登録料に含む）


asics
GEL
doubt
fatigue
doubt
doubt



(財)日本ハンドボール協会編 『ハンドボール』第五三三号

平成二十五年一月二十六日印刷
平成二十五年二月一日発行

東京都渋谷区神南一―一―一
電話 代表〇三―三四八一―二三六一
振替 〇〇一二〇―七―一〇二九三

編集兼発行人 川上憲太

定価 年間三三〇〇円